井尻Ｂ遺跡 13

—井尻Ｂ遺跡群第21次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第788集

2004

福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化受容の門戸として栄えてきた福岡市内には、多くの史跡や文化財が分布しています。本市では文化財の保護と活用に努めていますが、各種の開発事業によってやむを得ず失われる埋蔵文化財については、記録保存のための発掘調査を行っており、また調査成果の公開に努めています。

本書は、共同住宅建設に先立って行われた南区井尻B遺跡群第21次調査の成果について報告するものです。井尻B遺跡群は近年の調査により、青銅器やガラスの生産も行った弥生時代の拠点集落の一つであることが明らかになりつつあり、また奈良時代前後には寺院や官衙的な建物群が展開していたことも判明しています。今回報告する第21次調査では、弥生時代中期の甕棺墓地や古代の溝などが検出され、井尻B遺跡群の変遷を知る上で貴重な成果となりました。特に甕棺墓地は、大正年間に中山平次郎博士が報告した甕棺と連なるものと考えられ、学術的な意義も高いものと考えられます。

本書が、市民の皆様の文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いであります。

最後になりましたが、発掘調査にご理解を頂き、費用負担などのご協力をいただいた三和エステート株式会社をはじめとする関係各位の方々に対して厚く感謝の意を表します。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　生田征生

例　言

1．本書は、福岡市教育委員会が、共同住宅建設工事に先立ち、南区井尻5丁目9-2、9-5、9-20地内において、平成13（2001）年9月17日から同年11月5日まで行われた井尻B遺跡群第21次調査の報告書である。

2．遺構の呼称は記号化し、掘立柱建物をSB、竪穴住居址をSC、溝状遺構をSD、土坑をSK、柱穴をSP、甕棺墓をSTとしている。遺構番号は、SB・SC・SD・SPは各遺構でつけているが、SK・STは連番でつけているので注意されたい。

3．本書に用いる方位は磁北である。調査区の座標は任意のものであるが、福岡市教育委員会が井尻地区に設置した測量基準杭の国土座標数値（日本測地系）から移動して調査区内の国土座標位置を求めている（Fig.3）。また調査区内のレベルも、上記の測量基準杭の標高から移動して求めたものである。

4．本書に用いる遺構図は、久住猛雄、坂口剛毅、坂田邦彦が実測・作成した。遺物の実測は久住が行い、石器の実測（Fig.2）のみ吉留秀敏（埋蔵文化財課）が行った。現場（遺構）写真は久住が、遺物写真は力武卓治（埋蔵文化財課）が撮影した。製図および拓本は成清直子が行った。本書の編集・執筆は久住が行ったが、石器の記述のみは吉留が執筆した。

5．18頁Fig.29・30の甕棺および甕形土器の型式分類は、以下の文献による。
（甕棺）橋口達也1979「4．甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI 福岡県教育委員会
（土器）田崎博之1984「須玖式土器の再検討」『史淵』第百二十二輯　九州大学文学部
なお、土器の部分属性の特徴が前後2型式に分かれた場合には、その両者を記した。また、田崎博之氏の甕形土器の分類のうち「B3」については、他の諸属性を重視し、底部の特徴が上記論文の底部手法の典型とは異なる（Fig.29・30の「B3」はその典型よりも薄手の底部だが、「B4」の型式とはやや異なる）ものも含めて解釈して分類した。

6．本調査に関わる遺物・記録類（図面・写真）は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。資料が広く活用されることを望む。

目　次

第１章　はじめに ……1
１．調査に至る経緯 ……1
２．調査の組織 ……1
３．調査地点の位置と周辺の地理的歴史的環境…1
第２章　調査の記録 ……7
１．調査の経過と概要 ……7
２．甕棺墓（ST） ……8
３．竪穴住居址（SC）……15
４．溝状遺構（SD）……17
５．土坑（SK）……17
６．掘立柱建物（SB）……18
第３章　小結 ……18

挿図目次

Fig.１　調査地点とその周辺 ……2
Fig.２　調査区周辺表採石器実測図 ……2
Fig.３　井尻B21次調査区全体図……3
Fig.４　ST03甕棺墓実測図 ……4
Fig.５　ST03甕棺実測図 ……5
Fig.６　ST08甕棺墓実測図 ……5
Fig.７　ST08甕棺実測図 ……6
Fig.８　ST07甕棺墓実測図 ……6
Fig.９　ST07甕棺実測図 ……7
Fig.10　ST01甕棺墓実測図 ……7
Fig.11　ST01甕棺実測図 ……8
Fig.12　ST02甕棺墓実測図 ……8
Fig.13　ST02甕棺実測図 ……8
Fig.14　ST12甕棺墓実測図 ……9
Fig.15　ST12甕棺実測図 ……9
Fig.16　SC01出土土器実測図 ……9
Fig.17　SC01竪穴住居址平面図……10
Fig.18　SC01土層断面図……10
Fig.19　SC01断面図……11
Fig.20　SD002実測図 ……11
Fig.21　SD101実測図 ……11
Fig.22　SD001溝状遺構実測図・土層図 ……12
Fig.23　SD001・002他出土遺物実測図……13
Fig.24　SK06土坑実測図……14
Fig.25　SK11土坑実測図……14
Fig.26　SK09土坑実測図……14
Fig.27　SK10土坑・SP033実測図・土層図 ……15
Fig.28　土坑・柱穴出土土器実測図 ……16
Fig.29　井尻B21次出土小児用甕棺の組合わせ ……18
Fig.30　井尻B21次出土成人用甕棺の組合わせ ……18

図版目次

図版１　１．調査区全景（南から）／２．調査作業状況（西から）／３．ST07・ST08・SK06検出状況（南西から）／４．調査区東半甕棺墓群ほか出土状況（北から）

図版２　１．ST03・ST02出土状況（東から）／２．ST03出土状況（北から）／３．ST03出土状況（南から）／４．STO3墓壙底面状況（北から）／５．ST03甕棺検出状況（東から）／６．ST07甕棺検出状況（北から）／７．ST07出土状況（東から）／８．ST08・ST07出土状況（南から）／９．ST08出土状況（南から）

図版３　１．ST08完掘状況（南から）／２．ST08墓壙埋土土層状況（西から）／３．ST01出土状況（東から）／４．ST12出土状況（南から）／５．ST02出土状況（北東から）／６．SC01出土状況（西から）／７．SC01完掘状況（北から）／８．SC01ベッド部下土層状況（東から）／９．SC01柱穴土層状況（西から）／10．SD001ベルト１土層（南から）／11．SD001調査区南壁土層（北から）／12．SD002出土状況（北から）／13．SK06完掘状況（西から）／14．SK11完掘状況（東から）／15．SK09完掘状況（南から）

図版４　１．SK10東西ベルト北側土層／２．SK10東西ベルト南側土層／３．SK10，SP033・SK13完掘状況（東から）／（※４～14は遺物写真）４．ST07上／５．ST07下／６．ST03上／７．ST03下／８．ST08上／９．ST08下／10．ST12上／11．ST12下／12．ST01上／13．ST02上／14．ST02下

表表紙写真　井尻B21次調査区全景（北から）

裏表紙写真　ST07（手前）・ST08出土状況（北から）

第１章　はじめに

１．調査に至る経緯

平成13（2001）年５月16日、三和エステート株式会社より、南区井尻５丁目９番地内における埋蔵文化財の事前審査申請が福岡市教育委員会に提出された（13-2-123）。申請地は、周知の埋蔵文化財包蔵地（井尻Ｂ遺跡群）内に位置し、予定工事内容の埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、６月７日に埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を行った。申請地内のうち空閑地であった南側にトレンチを設定し、重機で掘削したところ、表土直下のGL－40㎝で明褐色ローム地山上面に達し、遺構を確認した。この結果、工事計画は埋蔵文化財を破壊することが明確となったため、文化財保護法第57条の２に基づき、工事に先立って記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、申請者と埋蔵文化財課で協議を行った。その結果、共同住宅建設工事範囲の埋蔵文化財発掘調査の実施について、三和エステート株式会社と福岡市の間で業務委託契約が平成13年９月４日に締結された。これを受け、福岡市教育委員会が主体となり９月17日より１ヶ月の予定で発掘調査を開始した。調査開始後、調査対象範囲内の既存住宅の解体が大幅に遅れたことから期間内の調査終了が困難になったため、協議の結果、期間を延長し、平成13年11月５日に発掘調査が終了した。

なお整理作業・報告書作成は、当初は平成14年度に行う予定であったが、担当者の業務過多によりその遂行が困難と予測されたため、協議の上、契約変更を行い、平成15年度に行った。

２．調査の組織

調査委託：三和エステート株式会社　代表取締役　石井 和俊
調査主体：福岡市教育委員会　教育長　生田征生
調査総括：埋蔵文化財課　課長　山崎純男
　　調査第一係長　山口譲治（調査年度）、調査第二係長　田中壽夫（整理年度）
調査庶務：文化財整備課　宮川英彦（調査年度）、御手洗清（整理年度）
事前審査：埋蔵文化財課事前審査係長　田中壽夫、事前審査係　大塚紀宜（試堀担当）
調査担当：埋蔵文化財課調査第一係　久住猛雄（整理年度は事前審査係）
調査作業：加藤勲、柴田常人、島崎昭二、高木美千代、高木章夫、田中肇、中山竹雄、林末孝、
　　林チセ子、赤星英子、二階堂三枝子、安田いく子、山本澄子、坂田邦彦、坂口剛毅
整理作業：成清直子、甲斐田嘉子、日下部由美子

なお発掘作業員の雇用にあたり、春日市教育委員会の平田定幸・境靖紀・井上義也の各氏には春日市の発掘現場の作業員の方々を紹介して頂き、また甕棺墓について春日市域の調査事例等の御教示を得た。また近隣で井尻Ｂ遺跡群第17次調査を行っていた横山邦継・屋山洋（いずれも当時埋蔵文化財課）には調査作業に関して助言と援助を得た。記して感謝申し上げたい。

３．調査地点の位置と周辺の地理的歴史的環境立地と環境（Fig.１）

井尻Ｂ遺跡群は、那珂川と諸岡川に挟まれた段丘上にあり、「奴国」の拠点集落である須玖・岡本遺跡群（春日市）と比恵・那珂遺跡群（博多区）のほぼ中間に位置する。第21次地点は遺跡群の中央やや南側に位置し、周囲の標高は13.5～13.8mを測る。この地点の北側隣接地は、九州帝国大学にいた中山平次郎が、大正13年に甕棺墓や竪穴を観察・報告した地点（中山平次郎1925「井尻村の弥生式遺跡」『考古学雑誌』第14巻第12号、同1927「井尻および寺福童の甕棺」『考古学雑誌』第17巻第12号）である可能性が高い。なお中山の報告した地点の推定については第３次調査の報告を参照されたい（宮井善朗編1995『井尻Ｂ遺跡２』福岡市埋蔵文化財調査報告書第411集、「Ⅳ．まとめ」）。また青柳

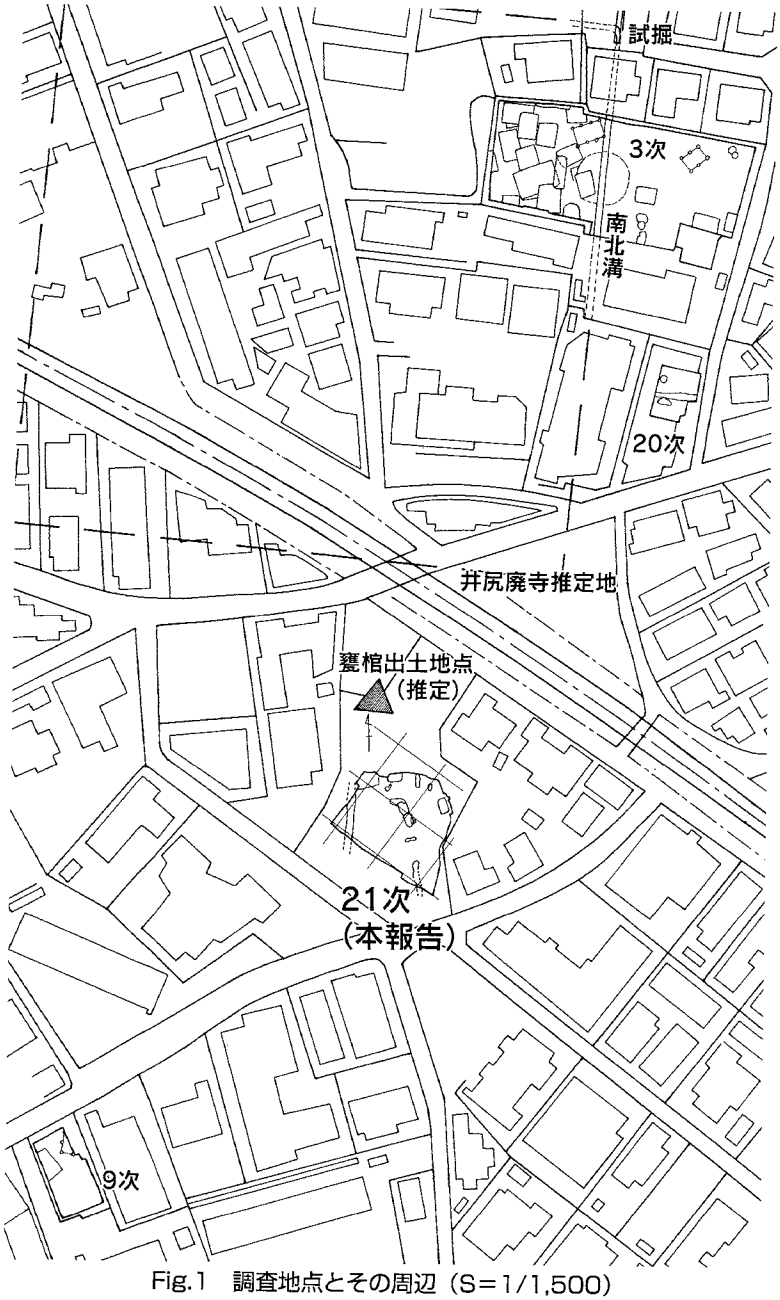


Fig.1　調査地点とその周辺（S＝1/1,500）

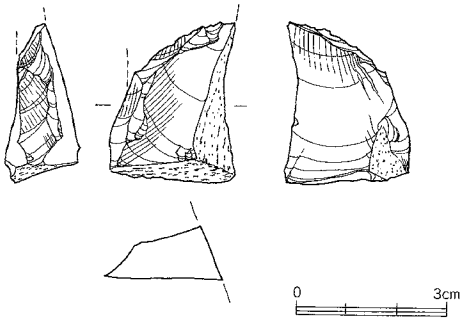
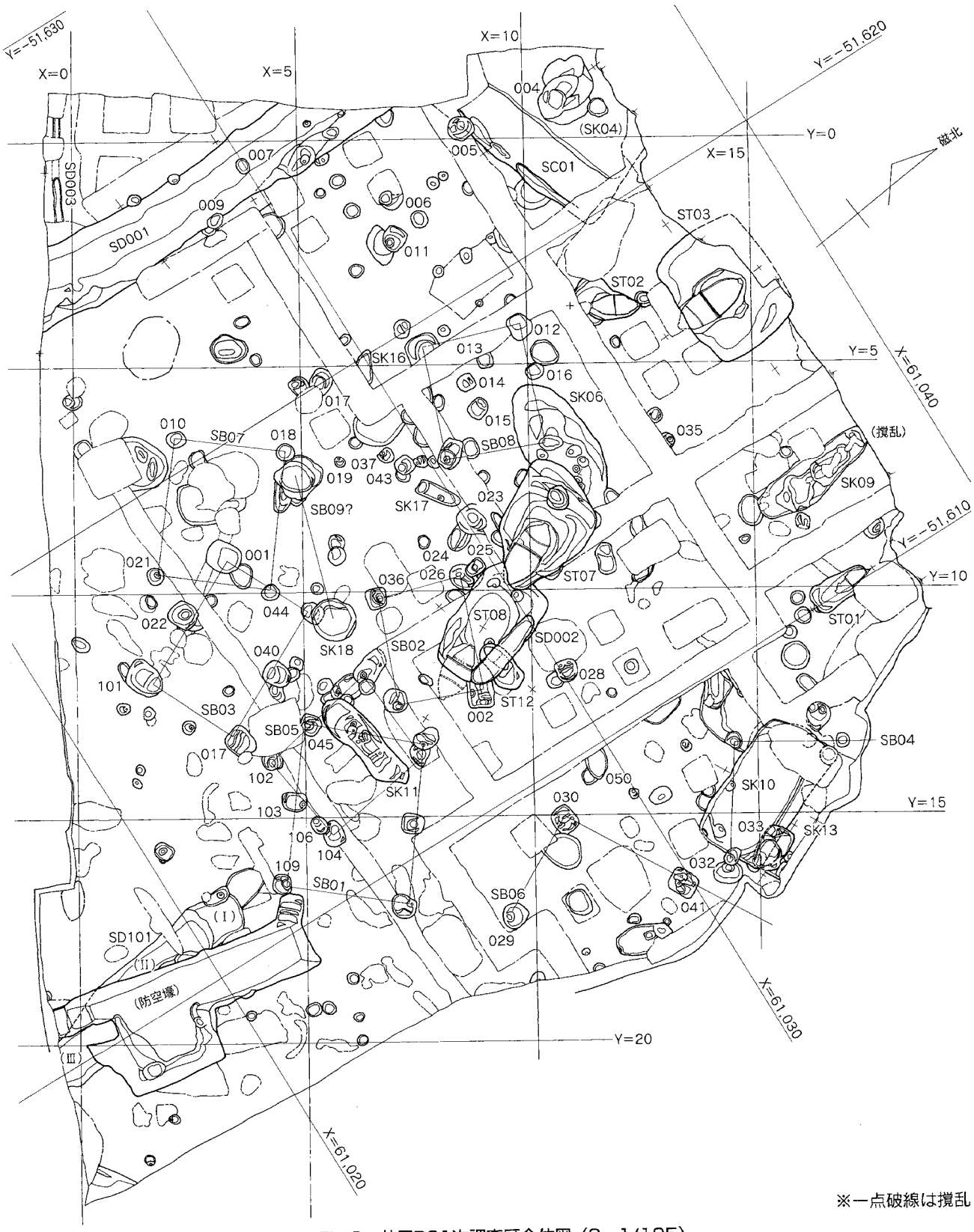


Fig.2　調査区周辺表採石器実測図（S＝2/3）

種信が『筑前國續風土記拾遺』那珂郡井尻村の条で述べる、「大塚」や「熊野権現」で出土した「鉾の鎔範」、「古瓦多く出る」「昔大寺など有し」とされる地点は今回の調査地の周囲にある。「大塚」は第１次調査の井尻Ｂ１号墳の可能性が高く（吉留秀敏ほか編1988『井尻Ｂ遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第175集、「第９章　３．井尻Ｂ古墳群について」）、南東200mに位置する。「鉾の鎔範」は広形銅矛鋳型の可能性が高いが（高橋建自1917「銅鉾銅剣考」『考古学雑誌』第７巻第３号）、この出土地は21次調査の南南西150mにある現在の井尻公民館付近である可能性が高いという（前掲第175集「第２章　遺跡の位置と歴史的環境」）。また「昔大寺有し」の部分については、「井尻廃寺」とされ飛鳥時代末から奈良時代との古瓦が周辺で出土しており、この寺域については第３次の南北溝の検出をもとにした復元がある（第411集）。ただし、その後の試堀調査で、この溝の延長上で北東隅角となる溝が検出されたため（９-２-220）、Fig.１のように修正しておきたい。なお３次調査では寺院基壇の可能性がある整地層が検出され、同様の土層の存在はすでに中山平次郎が指摘していた。

井尻Ｂ遺跡群は、およそ南北900m、東西400mの広がりを持つ遺跡であり、弥生時代については、約25ha面積を有し、青銅器生産関係の遺物も多い点から言えば「拠点集落」とするに足る内容を有し、これは例えば吉野ケ里遺跡（佐賀県）や唐古・鍵遺跡（奈良県）よりも若干劣るがほぼ匹敵する質量である。しかし、福岡平野においては須玖・岡本遺跡群と比恵・那珂遺跡群が圧倒的な質量を有するため、これらに次ぐ第２ランクの集落と位置付けられる。青銅器生産関係の遺物は、「熊野権現の後広鍛」の広形銅矛鋳型をはじめ、第６次の小型倣製鏡・銅鏃鋳型、銅鏃鋳型および青銅小塊（第529集）、第11次の中細形銅矛鋳型（第644集）、都市計



※一点破線は攪乱

Fig.3　井尻B21次調査区全体図（S=1/125）

画道路御供所井尻線の建設に伴う第17次のＢ・Ｃ区の広形銅戈鋳型・坩堝ないし取瓶２点・青銅付着土器があげられ（文化庁編2003『発掘された日本列島2003　新発見考古速報』）、さらに第17次Ｂ・Ｃ区ではガラス勾玉鋳型２点も出土している。

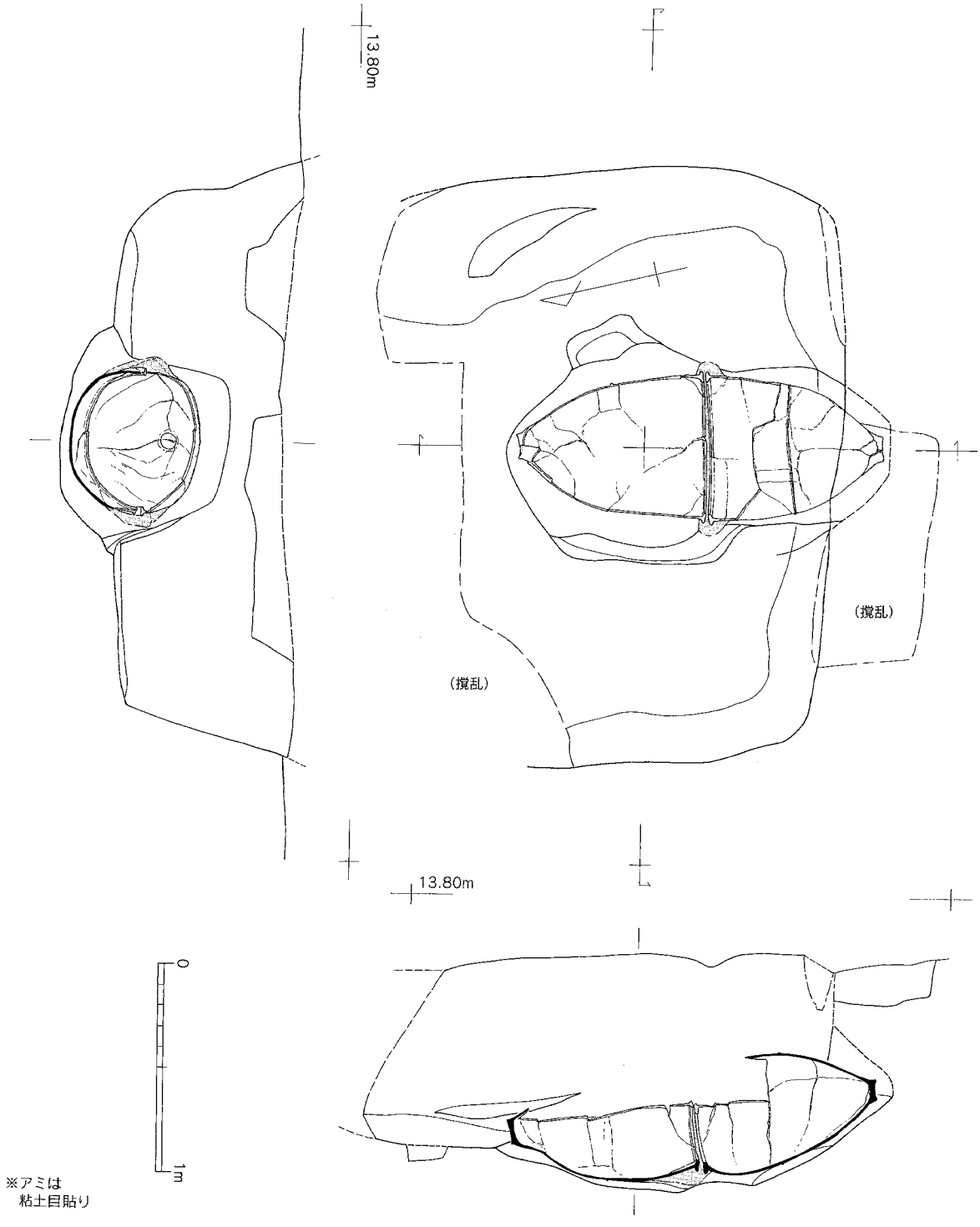


Fig.4　ST03甕棺墓実測図（S＝1/30）

これらは須玖・岡本遺跡群の圧倒的な集中には及ばないが、複数地点での工房の存在（坩堝や原材料も出土）は比恵・那珂遺跡群のありかたに次ぐ。また第９次調査では弥生時代中期後半の環濠ないし大規模な条溝がある（第678集）。同じ第９次では古墳時代前期の方墳の一部と推定される溝がある。また弥生時代後期から古墳時代前期の土壙墓・石蓋土壙墓群が第２次調査（第175集）で検出されている。井尻Ｂの北側に接する五十川遺跡南西部では、最近の調査において、古墳時代前期の方形周溝墓群・円墳や弥生時代終末期の箱式石棺墓が検出され、この時期の井尻Ｂ北部の集落と関係するもの

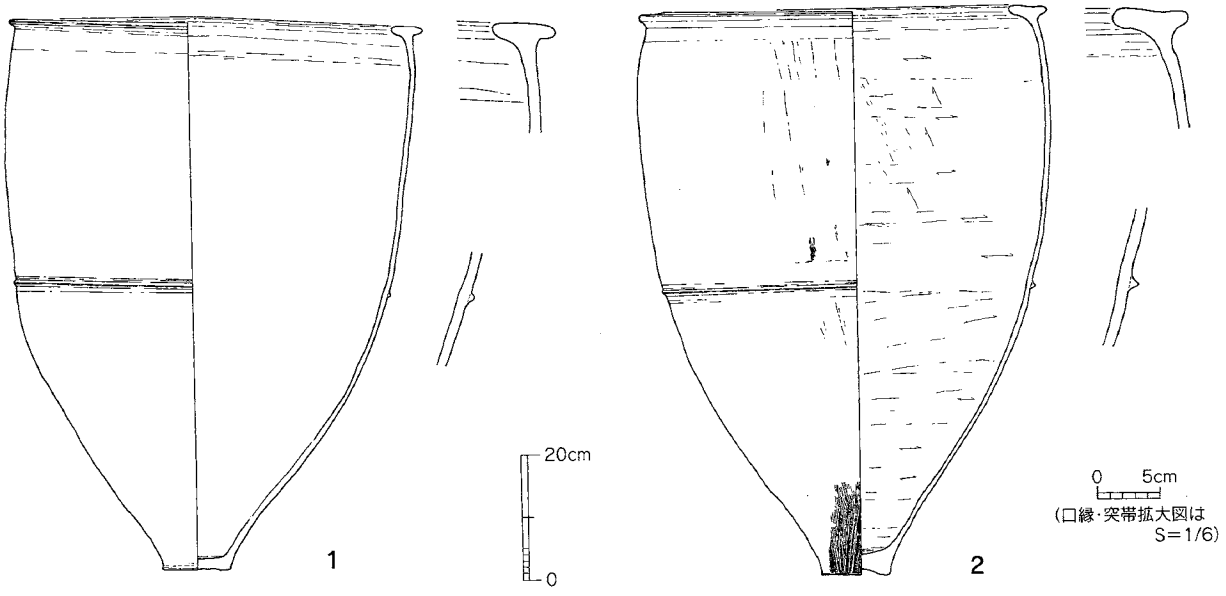


Fig.5 ST03甕棺（左：上甕、右：下甕）実測図（S=1/12）

であろうか。弥生時代中期の墓地は、井尻B北端の第16次調査（第721集）から第17次E区にかけて一連の土壙墓・甕棺墓群があり、本報告の第21次と同様に汲田式（須玖Ⅰ式）前後の墓地である。このように弥生時代に隆盛であった井尻B遺跡群の集落は古墳時代前期中頃に廃絶し、井尻B1号墳（5世紀中頃）など墳墓地として一部利用されるようになる。

次に遺構が多く展開するのは飛鳥時代末期から奈良時代である。第3次地点付近の「井尻廃寺」をはじめ、第9次の総柱建物、第17次B・C・D区では古瓦を伴う東西南北に直交する溝とこれに伴う掘立柱建物群および南北方向の道路状遺構、第22次調査では東西および南北の溝がそれぞれ検出されている。これらの遺構群は井尻Bの中央から北部にかけての広範囲において正方位を向いて展開する。本報告の第21次でも南北溝がある。特に第17次の溝と建物群は7世紀末に遡り、そのあり方から寺院

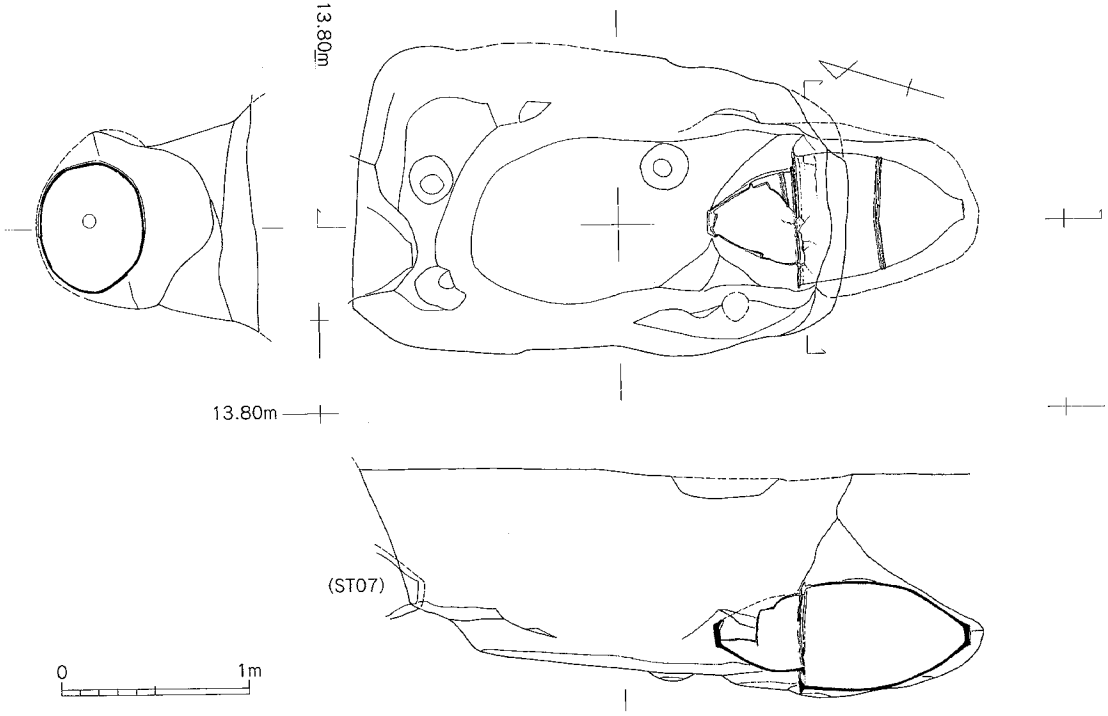


Fig.6 ST08甕棺墓実測図（S=1/40）

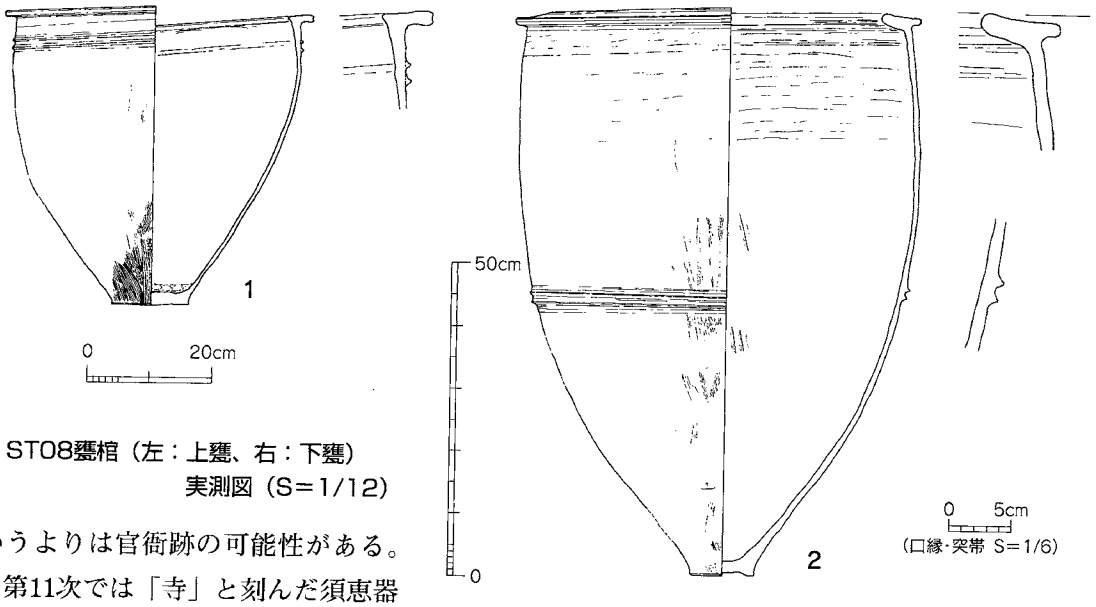


Fig.7　ST08甕棺（左：上甕、右：下甕）
実測図（S=1/12）

址というよりは官衙跡の可能性がある。一方、第11次では「寺」と刻んだ須恵器皿がある。このように井尻B遺跡群は、飛鳥時代末から奈良時代にかけて、寺院および官衙が複合した地域の拠点であった。

話が前後するが、井尻Bのローム層には後期旧石器時代後半期の石器群の検出がみられる。特に第2次では細石刃文化期の良好な資料が多く出土している。また第11次ではナイフ形石器などの資料がある。第21次地点では縦長剥片石器が表採されており、ここで報告する。Fig. 2は縦長剥片であり、打点部を欠損する。素材は漆黒色不透明良質の黒耀石で表面の風化が進む。自然面は平滑で角礫状を呈し、腰岳産黒耀石か。単設打面であり、背面には2～3面の先行剥離があり、前剥離は階段状となる。先端部が厚く作業面調整の剥離の可能性がある。後期旧石器時代後半期に属するか。

なお、Fig. 1には本報告の第21次地点周辺のみを記した。井尻B遺跡群の全体像と周辺の遺跡の位置については、上述した井尻B遺跡群の各報告書を参照されたい。

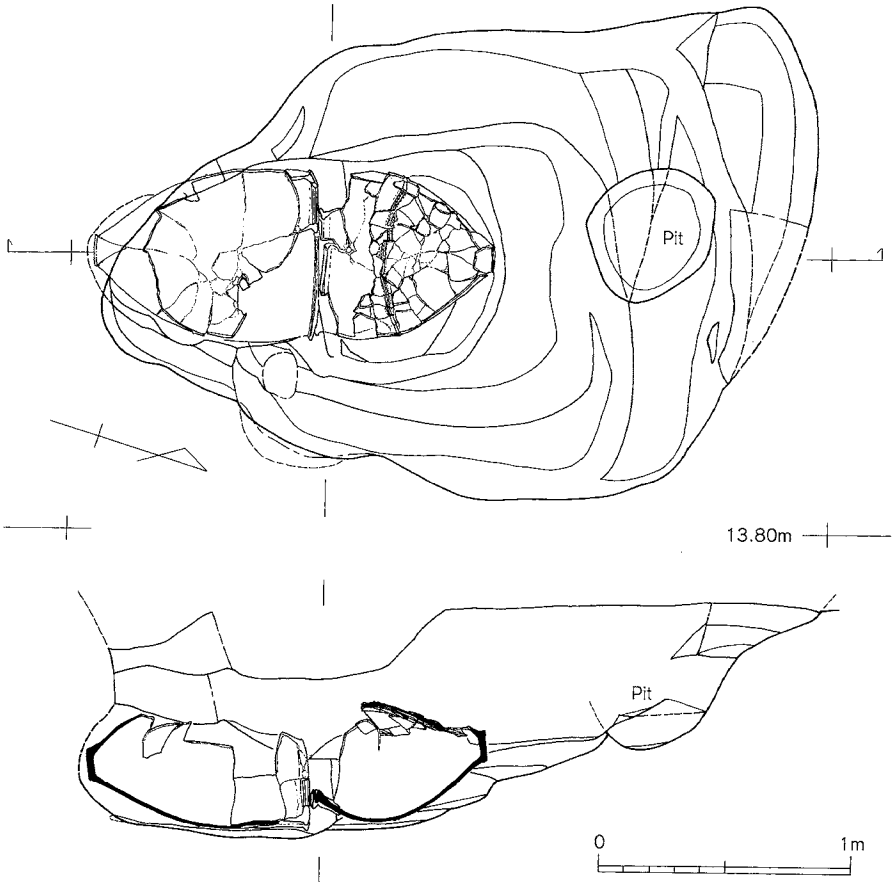


Fig.8　ST07甕棺墓実測図（S=1/30）

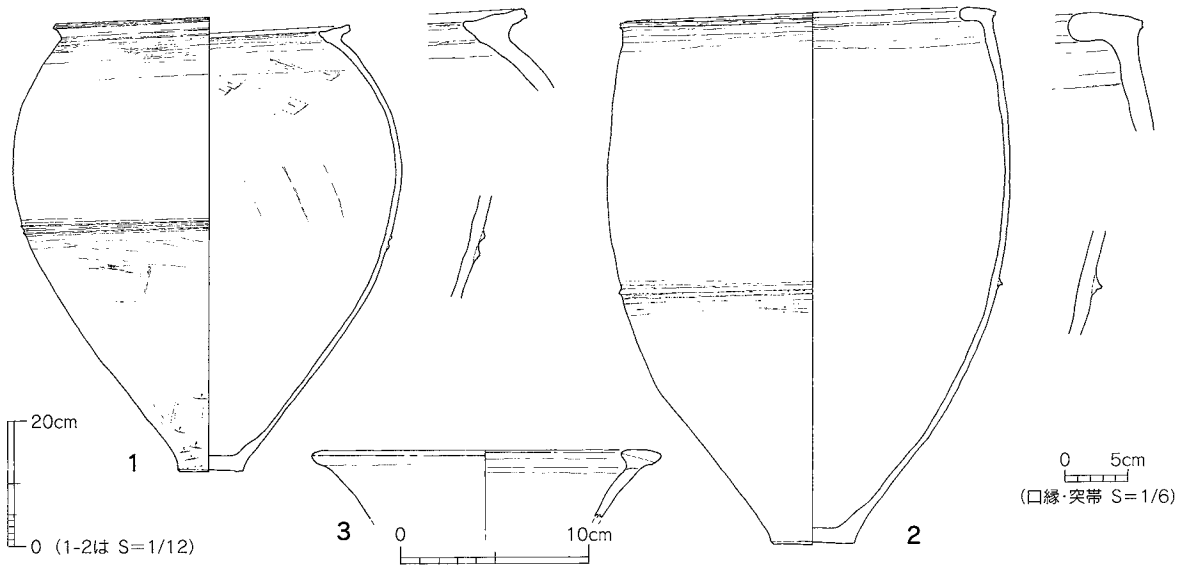


Fig.9 ST07甕棺（左：上甕、右：下甕）実測図（S=1/12）、出土土器実測図（S=1/4）

第2章 調査の記録

1．調査の経過と概要

発掘調査は平成13（2001）年9月17日に重機による表土除去から開始した。この時点では、調査対象範囲南東側の住宅が解体前であったため、見切り発車な調査開始であった。9月18日までに表土除去と、調査機材搬入・現場設営を終了した。9月21日までに座標・レベル移動および杭打ちを行ない、遺構の大部分を検出した。遺構覆土は黒色～暗褐色であり、明褐色～橙褐色のローム地山に対し比較的検出は容易であった（図版1-2，3）。9月下旬より遺構の掘削を本格的に開始し、順次個別の写真撮影や実測図の作成を行なった。この時点で甕棺墓が6基検出されるなど、当初予想された遺構の量よりも多いことが判明した。このためもあるが、9月末時点で、調査対象区南東部の住宅の解体撤去が大幅に遅れていたため、10月16日に調査終了の契約は現実的に無理であることが明らかとなった。これを受け、10月5日に委託者である三和エステート株式会社と現地協議を行ない、11月上旬まで調査期間を延長することになった。結局、住宅の解体撤去は10月中旬より開始されたが、その終了後の10月22日に旧住宅部分の表土除去を重機で行ない、残りの調査作業を開始した。なお、ここまでに当初の調査範囲の作業はほぼ終えていた。10月31日に調査区全体の写真撮影を行なった。11月5日までに機材撤収と重機による廃土の埋戻しを行ない、発掘調査を終了した。

調査では、弥生時代中期前半の甕棺墓群を中心に、弥生時代中期から古墳時代初頭、奈良時代から平安時代の遺構を検出した（Fig.3、3頁）。対象地の北部は近代以降の著しい削平を受けていた。甕棺墓は大型棺3基、小型棺3基があり、全て合口式である。甕棺の型式は、須玖式に近いものもあるが汲田式にほぼ限られており、小型棺はほぼ須玖Ⅰ式の範疇である。いずれも副葬品の出土はない（甕棺内の土は全てふるいにかけたが何も無かった）。小型棺1基を除き列状に分布しており、中山平次郎の甕棺発見推定地はこの延長上である。対象地北部の削平の崖面は高さ1.5m以上あり、大正年間の発見時の崖面がさらに南側へ侵食されたものと思われる。その他、弥生時代終末期の竪穴住居1棟、主に弥生時代（一部古代～中

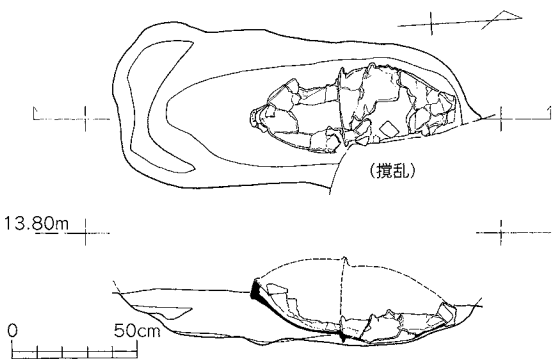


Fig.10 ST01甕棺墓実測図（S=1/30）

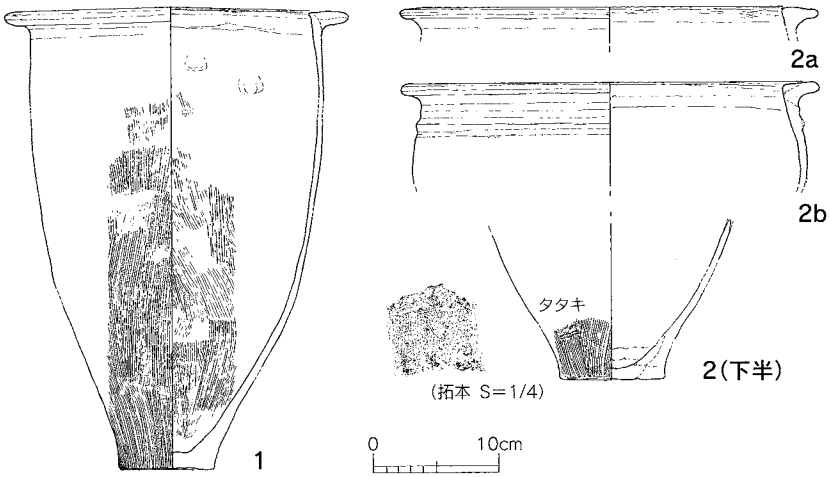


Fig.11　ST01甕棺（左：上甕、右：下甕）実測図（S=1/6）

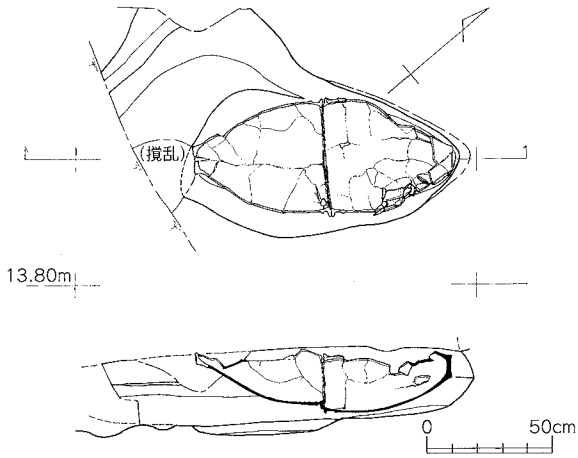


Fig.12　ST02甕棺墓実測図（S=1/30）

世か）の柱穴多数、（建物９棟以上）、弥生時代の土坑５基（うち１基は終末期の土壙墓か）、古代の溝３条を検出した。出土遺物は、パンケース45箱分があるが、大半は弥生時代の甕棺である。他に弥生土器、古式土師器、古代の土師器・須恵器・瓦、鉄製品、黒耀石剥片がある。なお、鉄製品として弥生時代後期と考えられる小型の手鎌が柱穴上層部で検出されていたが、作業時の不注意ないし盗難により、紛失してしまっている。以下、個別の主要遺構と出土遺物についての報告を行なうが、紙幅の都合上、簡潔な記載しかできないことを予めお断りしておきたい。ただし主要遺構については比較的詳細な図面を提示した。また出土遺物については、挿図に器種や一部については時期や特徴的な調整などについて注記を入れているので参照されたい。

2. 甕棺墓（ST）

（１）**ST03甕棺墓**（４頁Fig.４、図版２-１～５）　調査区北側検出の大型棺（合口棺）。主軸はN-13°-E。掘方は東西に長い長方形。中央部を一段掘り下げ上甕を埋置

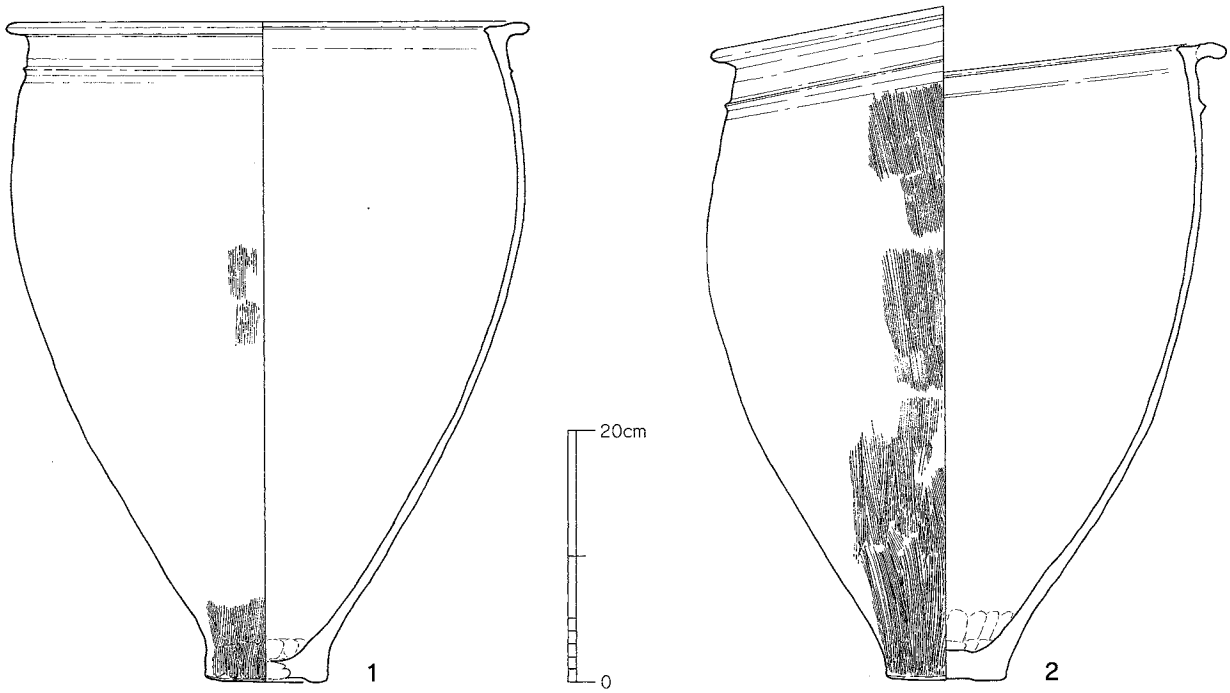


Fig.13　ST02甕棺（左：上甕、右：下甕）実測図（S=1/6）

し、南壁に横穴を30cm掘り下甕を埋置する。埋置角度は7cm上甕の方が低い。掘方底面には甕棺の圧痕が残る。合口部目張りに白色粘土を使用する。墓壙は285×225cmと他より大きい。 **ST03甕棺上甕**（Fig.5左、図版4-6）口径65.6cm、器高88.2cm。口縁部は内側の方が突出し、外側が僅かに低い。胴部中位に1条の三角突帯がある。内外面ともに丁寧なナデ仕上げ。器壁は薄く7mm前後の部分あり。底部は内に僅かに凹む平底。橙色を呈する。 **ST03甕棺下甕**（Fig.5右、図版4-7） 口径64.8cm、器高89.2cm。口縁部は内側にかなり突出し、外側が低く上面が内湾する。胴部中位に1条の三角突帯がある。外面はタテハケ後ナデ、内面はナデ仕上げ。器壁は上甕同様に薄い。底部はやや上げ底気味。焼成良好で橙色を呈する。

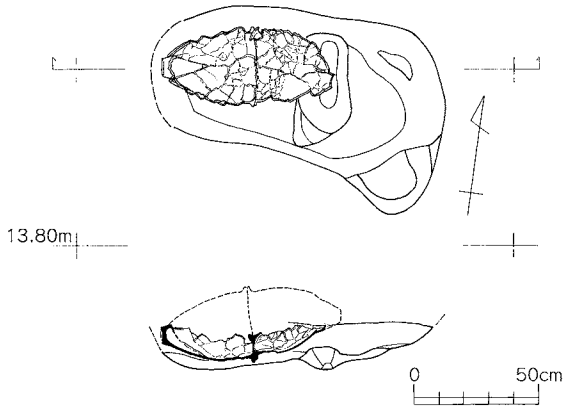


Fig.14 ST12甕棺墓実測図（S=1/30）

（2）**ST08甕棺墓**（5頁Fig.6、図版2-8,9・3-1,2） 調査区中央で検出の大型棺（合口棺）。主軸はN-17.5°-W。ST07に切られ、SB02を切る。掘方は南北に長い長方形。南側を一段掘り下げ、さらに南壁に横穴を60cm掘り甕棺を埋置する。甕棺の埋置角度はほぼ水平。上下の甕の口縁部径がかなり違うが特に目張り土はない。墓壙は195×125cmである。 **ST08甕棺上甕**（Fig.7左、図版4-8） 口径49.0cm、器高47.7cm。甕棺専用土器ではなく日常用甕形（鉢形に近い）土器である。口縁部は内側には殆ど突出しない逆L字状、ほぼ水平または外側が僅かに高い。口縁部の下に2条の三角突帯がある。外面はハケメ後ナデ、内面はナデ仕上げか（摩滅）。底部は全面接地の平底。橙色から黄橙色。器壁は薄く6mm前後の部分あり。 **ST08甕棺下甕**（Fig.7右、図版4-9） 口径64.6cm、器高90.2cm。口縁部は内側に突出し、外側が低く上面はやや内湾する。胴部中位に2条の三角突帯があるが、接してM字状となる。外面は細かいハケメ後ナデ仕上げ、内面はナデ仕上げ（ハケ

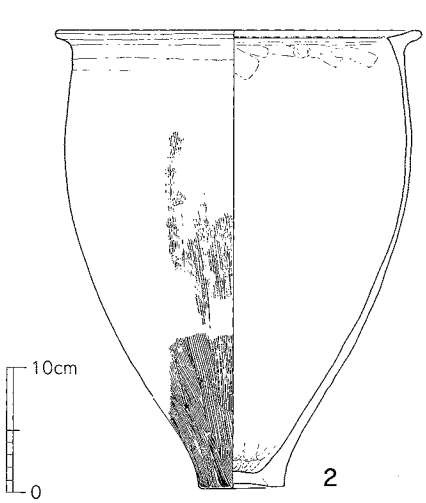


Fig.15 ST12甕棺（左：上甕、右：下甕）実測図（S=1/6）

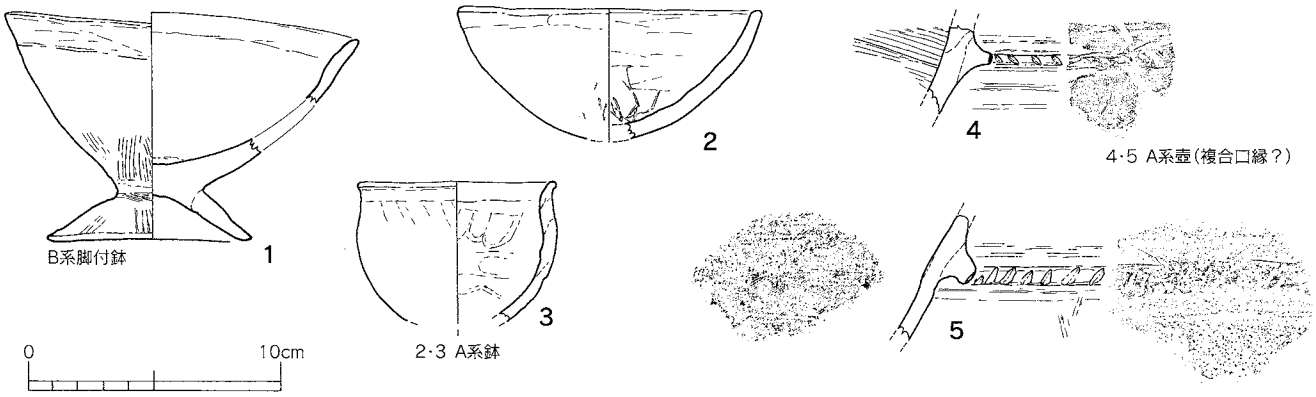


Fig.16 SC01出土土器実測図（S=1/3）

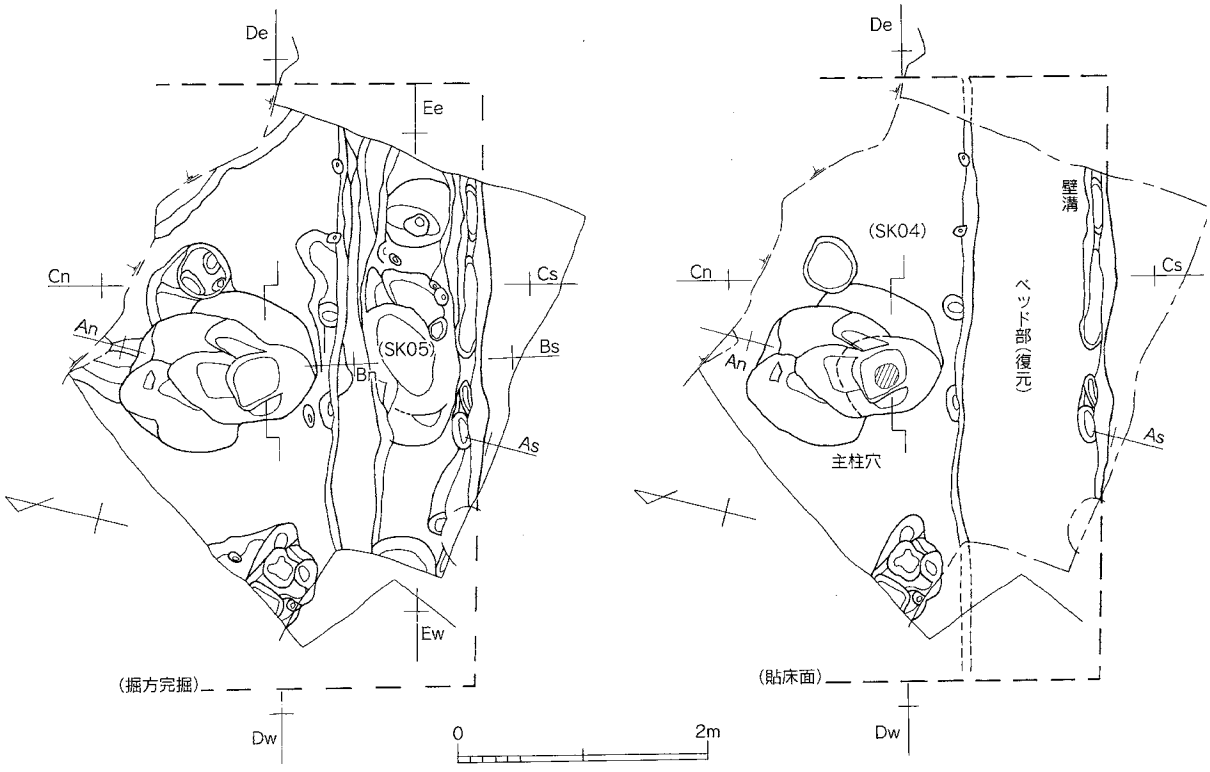
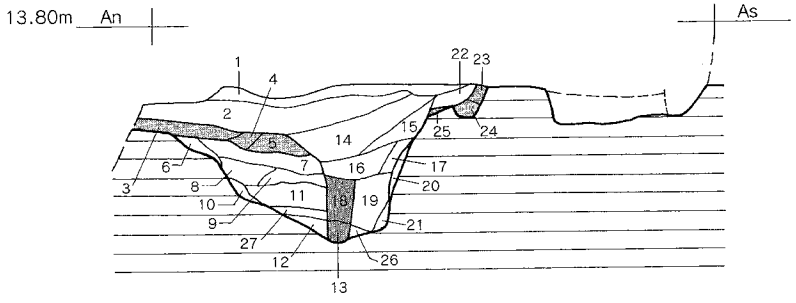
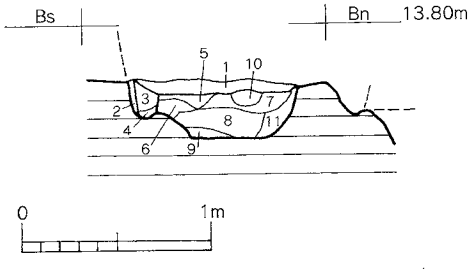


Fig.17　SC01竪穴住居址平面図（S＝1/60）



SC01土層A

1　黒色土　　2　黒色土（土器片多い）
3～5　貼床層（暗赤褐色ローム土主体で堅くしまる）
6　赤褐色ローム土
7　暗赤褐色ローム土＋明灰褐色土まじり
8　暗赤褐色ローム土＋明黒色土ブロック
9　暗赤褐色ローム土＋明灰褐色土まじり
10　赤褐色ローム土
11　明黒色土（シルト質）＋ロームブロック
27　明黒色土ブロック（＋ローム土）
12　暗赤褐色ローム土
13　明黒色土（シルト質）＋ロームブロック（柱痕）
18　明黒色土（シルト質）（柱痕）
14　明黒色土（シルト質）
15　黒褐色土（シルト質）＋ロームブロック少し
16　明黒褐色土（シルト質）＋ロームブロック
17　明黒褐色土（シルト質）
19　黒色土（シルト質）
20　明赤褐色ローム土＋明黒褐色土まじり
21　明黒色土（シルト質）
22　暗黒褐色土（シルト質）＋ローム土少し
23　暗赤褐色ローム土＋明黒褐色粘質土まじり
24　明黒褐色土（シルト質）＋暗赤褐色ローム土まじり
25　暗赤褐色ローム土＋明黒褐色粘質土まじり（貼床土）
26　ローム崩落明褐色土＋明黒色土



SC01土層B

1　暗黒褐色土（シルト質）（土器片含む）（床直上覆土）
2　黒褐色土＋暗赤褐色ローム土
3　黒褐色土（シルト質）
4　黒灰褐色粘質土（堅くしまる）
5　暗赤褐色土ローム土＋黒褐色粘質土まじり
6　（暗）赤褐色ローム土＋黒褐色粘質土まじり
7　赤褐色ローム土
8　黒灰褐色粘質土＋赤褐色ローム土まじり
9　明赤褐色ローム土＋黒灰褐色粘質土まじり
10　赤褐色ローム土＋淡黒灰褐色粘質土まじり
11　（暗）赤褐色ローム土＋淡黒灰褐色土まじり

Fig.18　SC01土層断面図（S＝1/40）

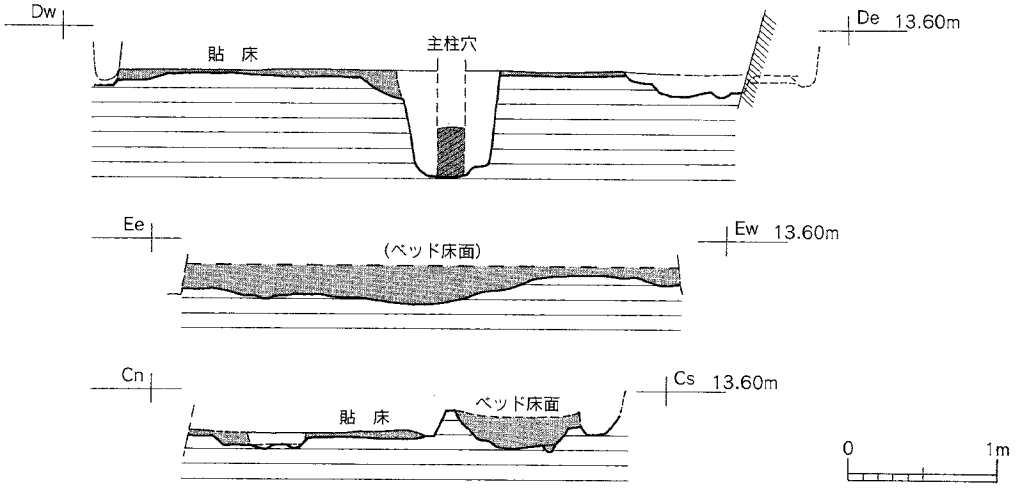


Fig.19 SC01断面図（S=1/50）

メ痕跡）。底面は僅かに上げ底気味の平底。橙色を呈する（一部は赤色や黄褐色）。器壁はやや薄く9㎜以下の部分がある。

（3）**ST07甕棺墓**（6頁Fig.8、図版2-6～8） 調査区の中央で検出した大型棺（合口棺）。主軸はN-17.5°-W。ST08とSK06を切る。掘方は不整五角形状で、北側に広がり、特に北西斜面は段状となる。甕棺を埋置した南側はすぼまる。南側を一段掘り下げ、さらに南壁に横穴を15㎝掘り甕棺を埋置する。埋置角度は上甕が5㎝高い。合口部には特に目張り土はない。掘方北側中央に柱穴があるが、これは掘方上方からのものか。墓壙は290×190㎝を測る。 **ST07甕棺上甕**（Fig.9左、図版4-4）口径47.2㎝、器高72.2㎝。砲弾形の通例の形態ではなくいわゆる丸味をおびた甕棺で、胴部が倒卵形状。最大径は中位やや上。口縁部は上面が内傾する短いく字形である。胴部中位に2条の三角突帯がある。内外面ともにナデ仕上げだが、いずれもハケメ（板ナデ）痕跡あり。底部は内にごく僅かに凹む平底。橙色。器壁はやや薄く8㎜未満の部分がある。

ST07甕棺下甕（Fig.9右、図版4-5） 口径59.6㎝、器高84.4㎝。口縁部は内側に突出するが、外側の突出はきわめて弱く、上面は外側がやや低いか水平に近い。胴部がやや張る器形。胴部中位に1条の三角突帯がある。内外面ともに丁寧なナデ仕上げ。底面は平底。主に橙色を呈するが、内面は一部にぶい黄橙色。器壁はやや薄く9㎜以下の部分がある。Fig.9-3は墓壙出土の広口壺口縁部破片。口径18.5㎝（復元）。口縁部は内側に若干突出し、上面は少し外傾する。黄橙色。須玖Ⅰ式。

（4）**ST01甕棺墓**（7頁Fig.10、図版3-3） 調査区北東側検出の小型棺（合口棺）。主軸はN-1.5°-E。北東部

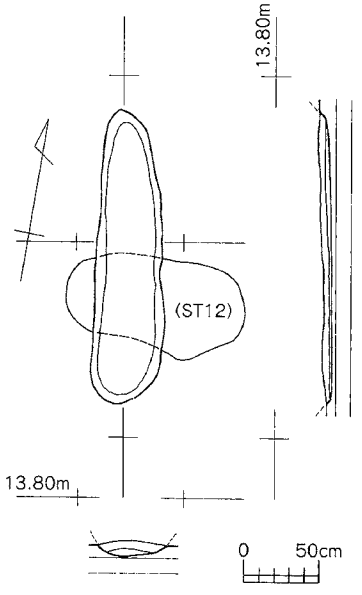


Fig.20 SD002実測図（S=1/50）

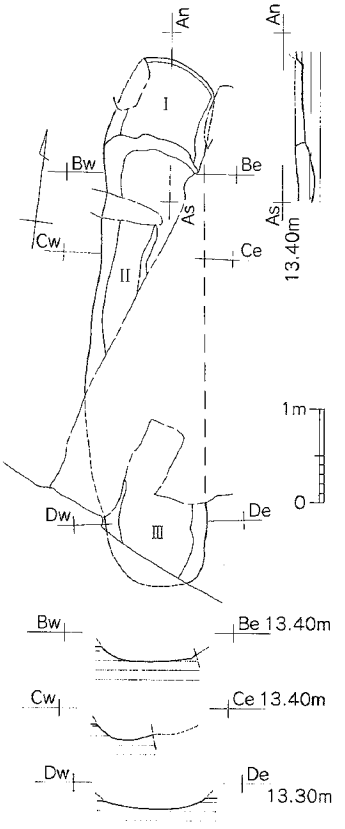


Fig.21 SD101実測図（1/80）

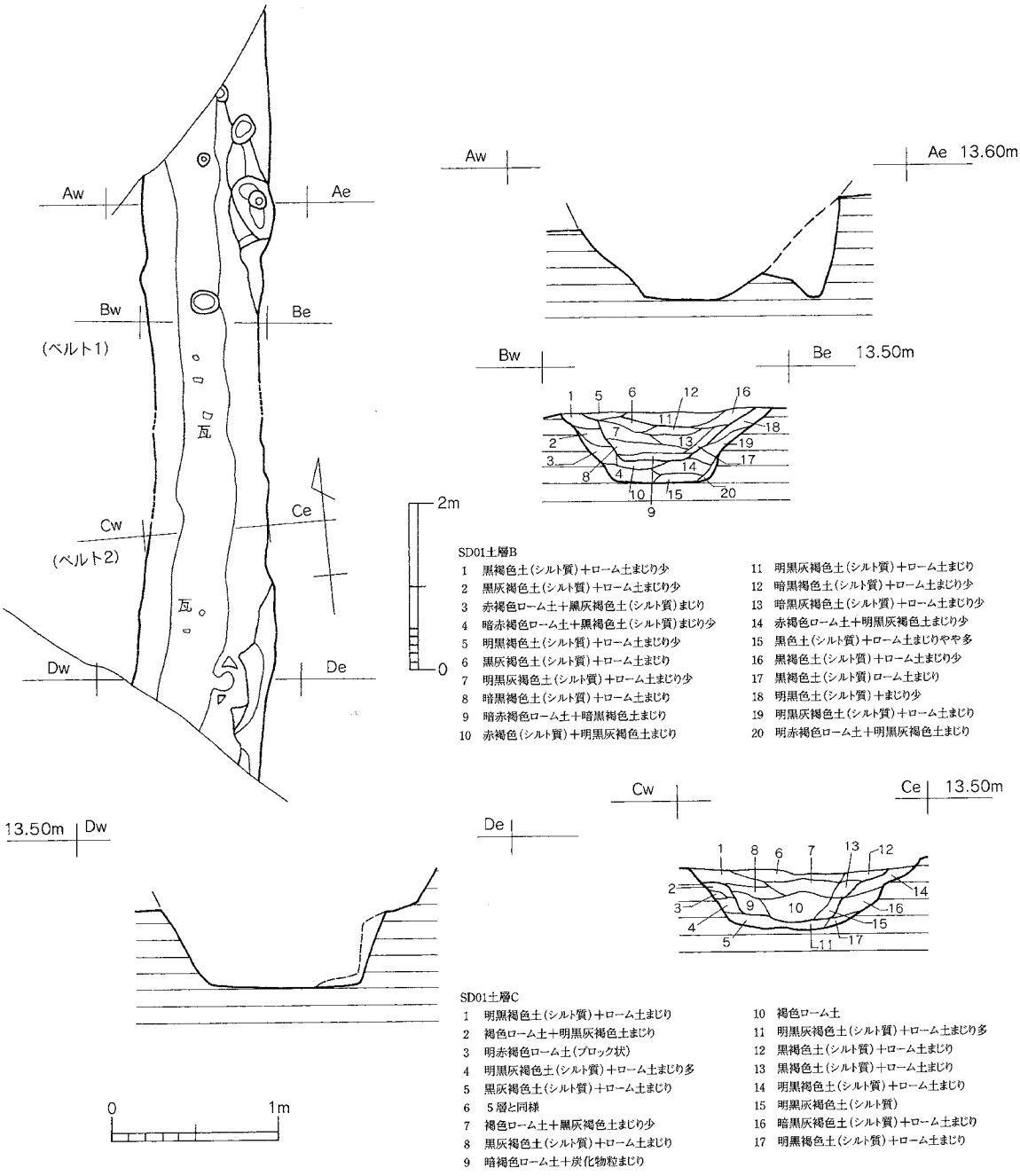


Fig.22　SD001溝状遺構実測図・土層図（S＝1/80）

を撹乱され、上部も削平され遺存状況が悪い。墓壙掘方は南北に長い不整長方形で、150×63㎝を測る。南側斜面は段状となる。甕棺は北側に埋置され、埋置角度は7.5°上甕が高い。　**ST01甕棺上甕**（Fig.11左、図版４-12）　口径27.3㎝、器高36.9㎝。日常用甕形土器の転用。口縁部は内側には殆ど突出しない逆Ｌ字状で、上面は水平。なお図面では細長い器形だが、遺存状況の影響で歪みがあり、本来はもう少し口径や胴部径が大きい可能性がある。内外面ともにハケメを施す。底部はごく僅かに内に凹む平底。橙色。器壁は薄く４㎜前後の部分あり。　**ST01甕棺下甕**（Fig.11右）　遺存状況が非常に悪く上下が接合できなかった。口縁部ＡとＢは同一個体の反対側の破片で断面形が異なる。Ａは短い逆Ｌ字状だが、Ｂは口縁がやや内傾し如意形の名残りがある。口縁部下に低い三角突帯がある。調整は摩滅顕著で不明確だが、底部付近は外面ハケメ、内面ナデ。外面下部にタタキの痕跡。底部はほぼ平底。橙色ないし黄橙色。須玖Ⅰ式。

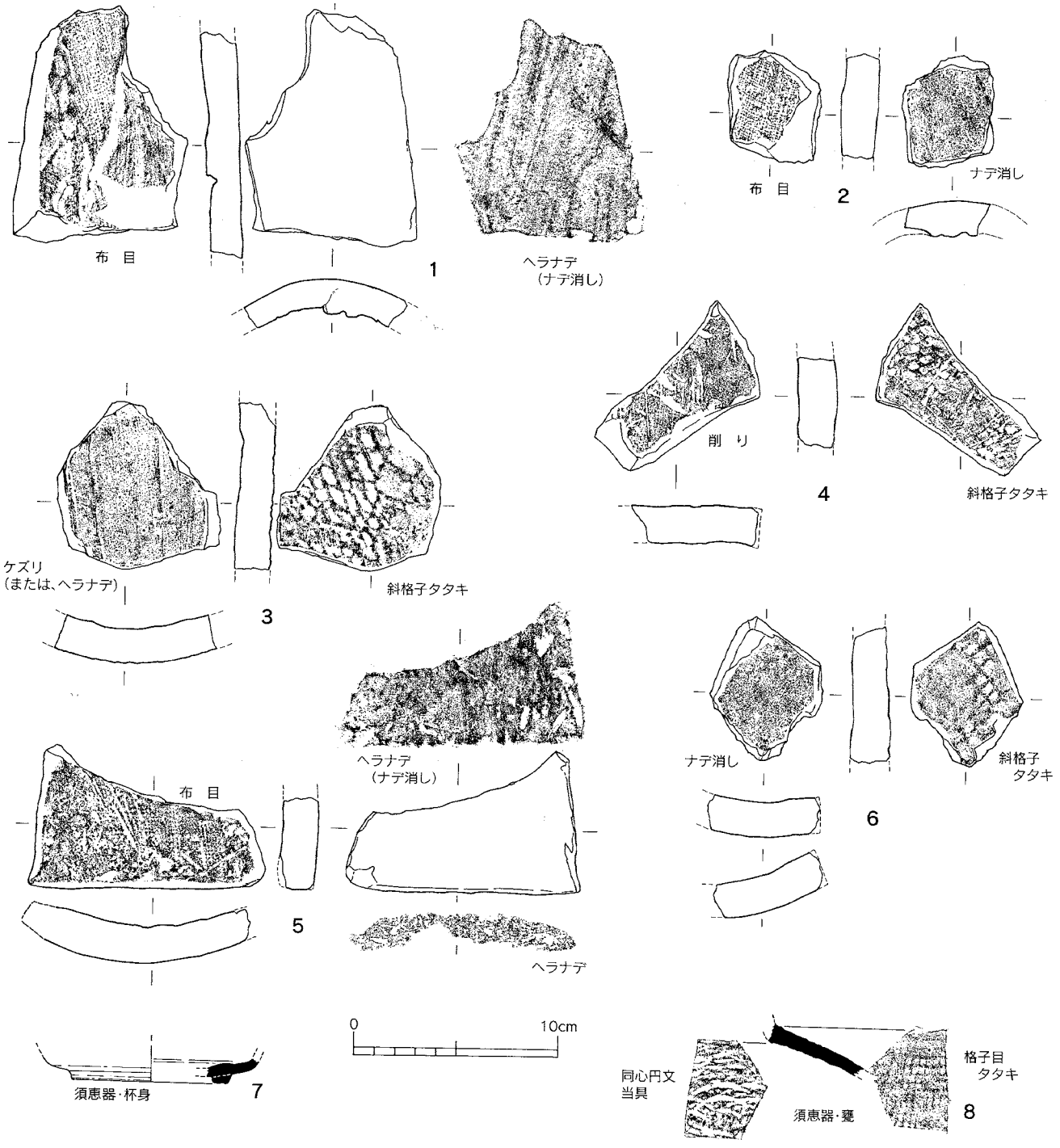


Fig.23　SD001・002他出土遺物実測図（S＝1/3）

（5）**ST02甕棺墓**（8頁Fig.12、図版3-5）　調査区北側、ST03南西で検出した小型棺の合口棺。主軸はN-39°-E。南側を撹乱され、上部も削平され遺存状況は悪い。掘方は不整三角形状で、西側が広くなり段状斜面となる。甕棺は北東側に埋置され、わずかに横穴を掘る。埋置角度は2.5°上甕が高い。掘方底面は中央部が低い。墓壙は145×90cmである。　**ST02甕棺上甕**（Fig.13左、図版4-13）口径41.2cm、器高52.0cm。日常用甕形土器である。口縁部は逆L字状から鋤先状で、上面は僅かに内傾する。胴部は口縁部よりも径が大きく張る。器壁は薄く5mm前後の部分あり。口縁部下に1条の三角突帯がある。外面はハケメが残る（摩滅多い）。内面はナデ仕上げ。底部は僅かに上げ底気味の平底。明橙色。　**ST02甕棺下甕**（Fig.13右、図版4-14）　口径40.8cm、器高52.2cm。全体に歪み、口縁部の高さが一定しないが本来のもの。口縁部は内側に僅かに突出し、上面は水平か外側に僅かに低い

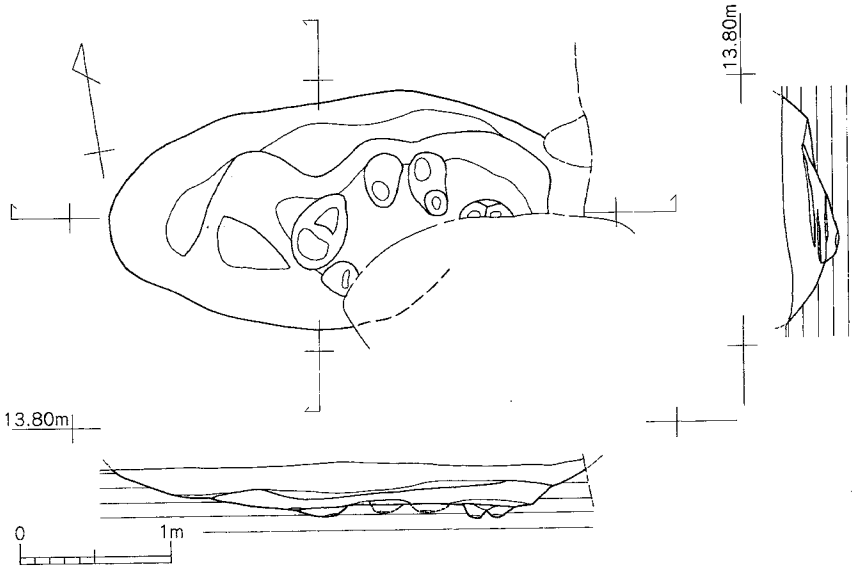
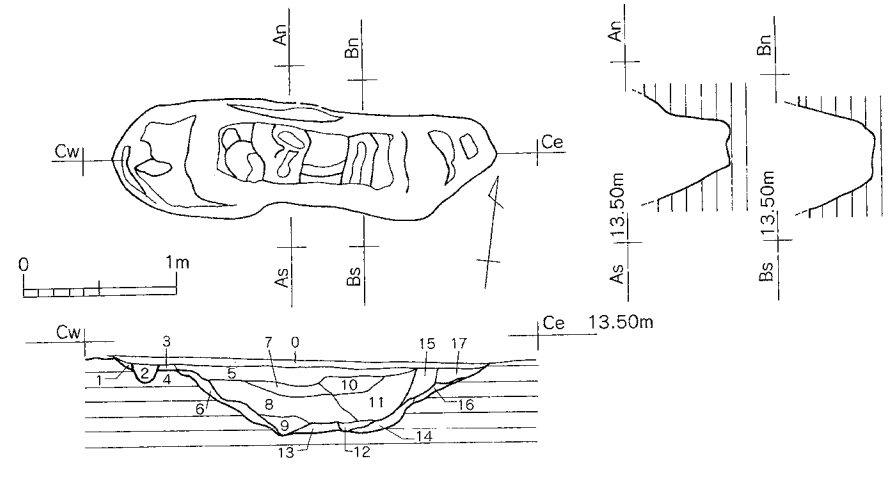


Fig.24　SK06土坑実測図（S＝1/50）



SK11土層

1　暗黄褐色ローム土＋黒灰褐色土まじり
2　黒灰褐色土(しまる)
3　明黒灰褐色土(しまる)
4　赤橙褐色ローム地山
5　黒色土(シルト質)
6　暗赤褐色ローム土＋黒灰褐色粘質土まじり
7　明黒色土(シルト質)
8　明黒褐色土＋ロームブロック
9　黒灰褐色粘質土＋ローム暗赤褐色土まじり
10　暗黒褐色土(軟質)
11　黒褐色土(シルト質)＋ローム土まじり(軟質)
12　黒灰褐色粘質土＋暗赤褐色ローム土まじり
13　赤褐色ローム土＋黒灰褐色粘質土まじり
14　暗赤褐色ローム土＋黒灰褐色土(シルト質)まじり
15　黒灰褐色土(シルト質)
16　赤褐色ローム土＋明黒灰褐色土(シルト質)まじり
17　明黒灰褐色土(シルト質)＋暗赤褐色ローム土まじり
0　黒色土(軟らかい)

Fig.25　SK11土坑実測図（S＝1/50）

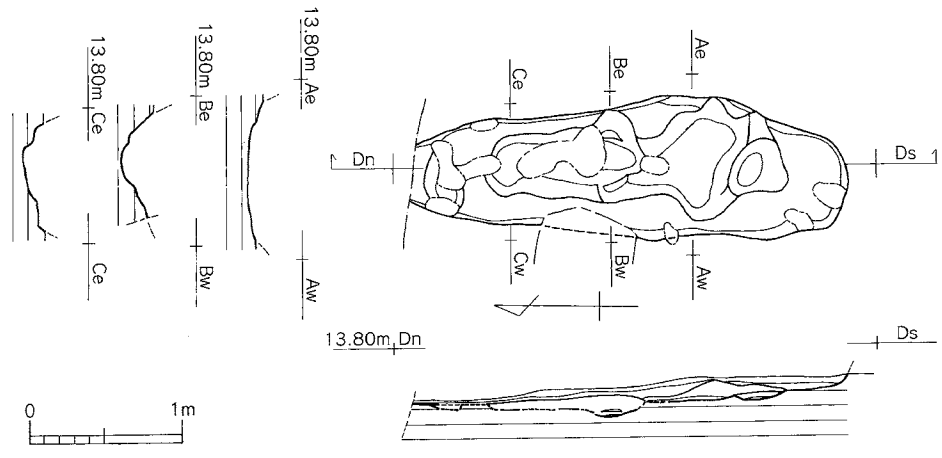


Fig.26　SK09土坑実測図（S＝1/50）

鋤先状。上甕と同様に胴部が張る。器壁も上甕と同様に薄い。口縁部下に１条の三角突帯がある。外面はハケメ、内面はナデ仕上げ。底面はほぼ接地の平底だがごく僅かに内に凹む。明橙色。外面に煤が、内面にコゲが付着し、日常煮沸土器の転用である。なおST02は、上下ともに他より新しい傾向があり須玖Ⅱ式古相に下るか。

（６）**ST12甕棺墓**（９頁Fig.14、図版３-４）　調査区中央検出の小型棺の合口棺。ST08を切り、SD002に切られる。上部を削平され遺存状況はかなり悪い。主軸はN-81°-E。掘方は不整長方形状だが、南東側が広がり段状斜面となる。甕棺は西側に設置される。埋置角度は７°上甕が高い。掘方底面は中央部が溝状にやや低い。墓壙は115×60cmである。

ST12甕棺上甕（Fig.15左、図版４-10）　口径27.8cm、器高は残存31.3cm。底部は欠損。口縁部は逆Ｌ字状で、上面はほぼ水平。器壁は薄く４mm近い部分がある。

口縁部下に顕著なヨコナデの凹凸。外面はハケメ、内面はナデ仕上げ（摩滅し不明確）。橙色。**ST12甕棺下甕**（Fig15右、図版４-11）　口径29.2cm、器高36.3cm。口縁部は逆Ｌ字状だが、上面は内傾し僅かに内湾気味。須玖Ⅱ式に成立する内湾く字甕の祖型か。器壁は薄く

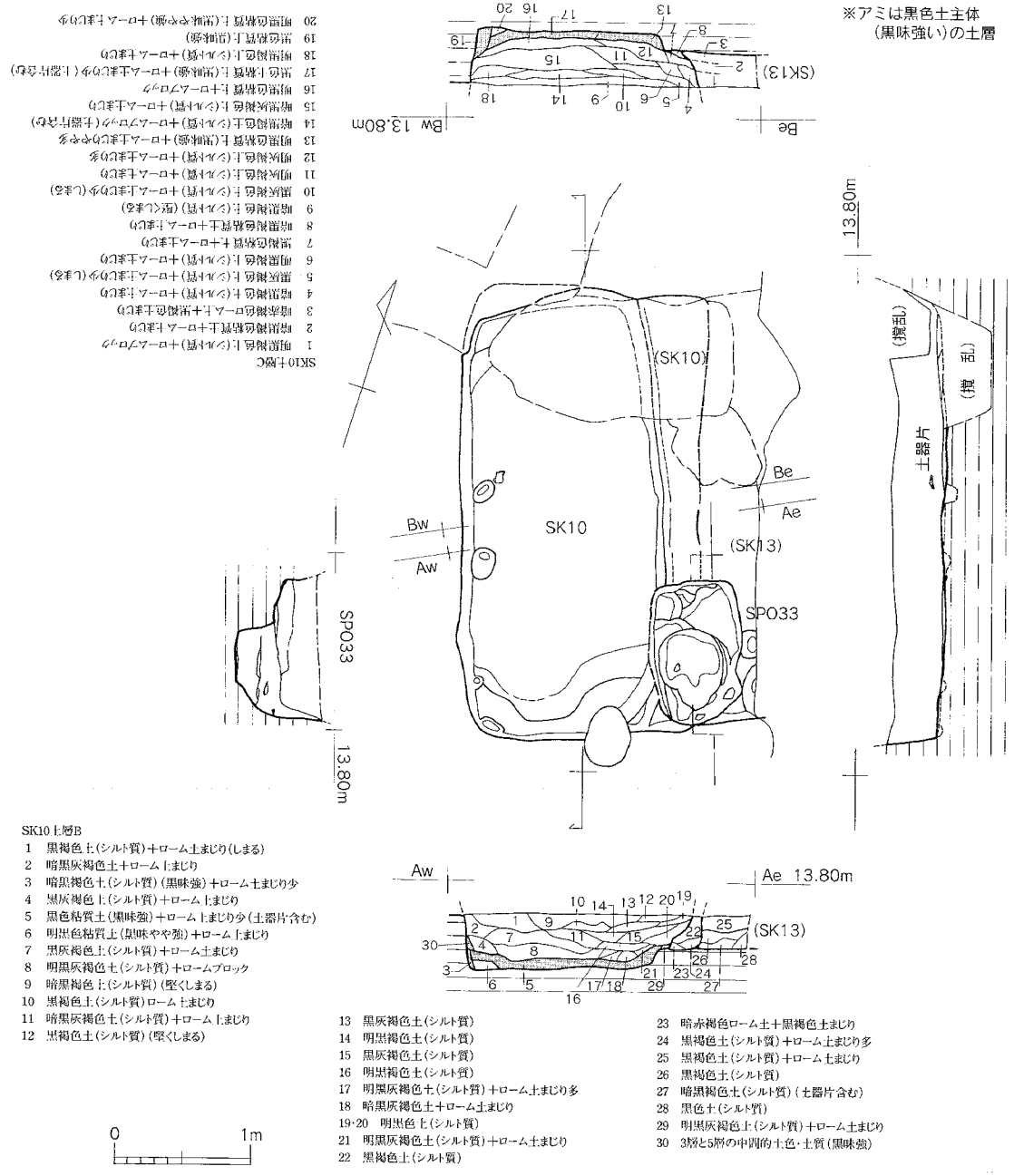


Fig.27　SK10土坑・SP033実測図・土層図（S＝1/50）

4㎜近い部分あり。外面はハケメ、内面はナデ仕上げ（上部板ナデ痕跡)。底面はやや上げ底気味の平底。橙色から明橙色。ST12は須玖Ⅰ式でも最新相か。

3．竪穴住居址（SC）

・SC01（10～11頁Fig.17～19、図版３-6～9）　調査区北西隅で検出した。当初は土坑２基の重複のように見えたため、住居土間部を**SK04**、埋殺しのベッド下部土坑を**SK05**として掘削してしまった。これはベッド貼床面が検出面直下であったため誤ったもので、掘り進むうち壁周溝と主柱穴SP004が現れたので竪穴住居と認定した。短辺4.8m前後の２本柱長方形住居か。主柱穴SP004は下部に柱痕が残り、柱抜取り時に最下部を切断したか。　**出土遺物**（９頁Fig.16）　弥生時代終末（ⅠA期）の土器群。１のみ外来系（B系統)、他は在来系（A系統)。なお弥生終末期前後の土器の時期と系統分類は久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XIXによる。

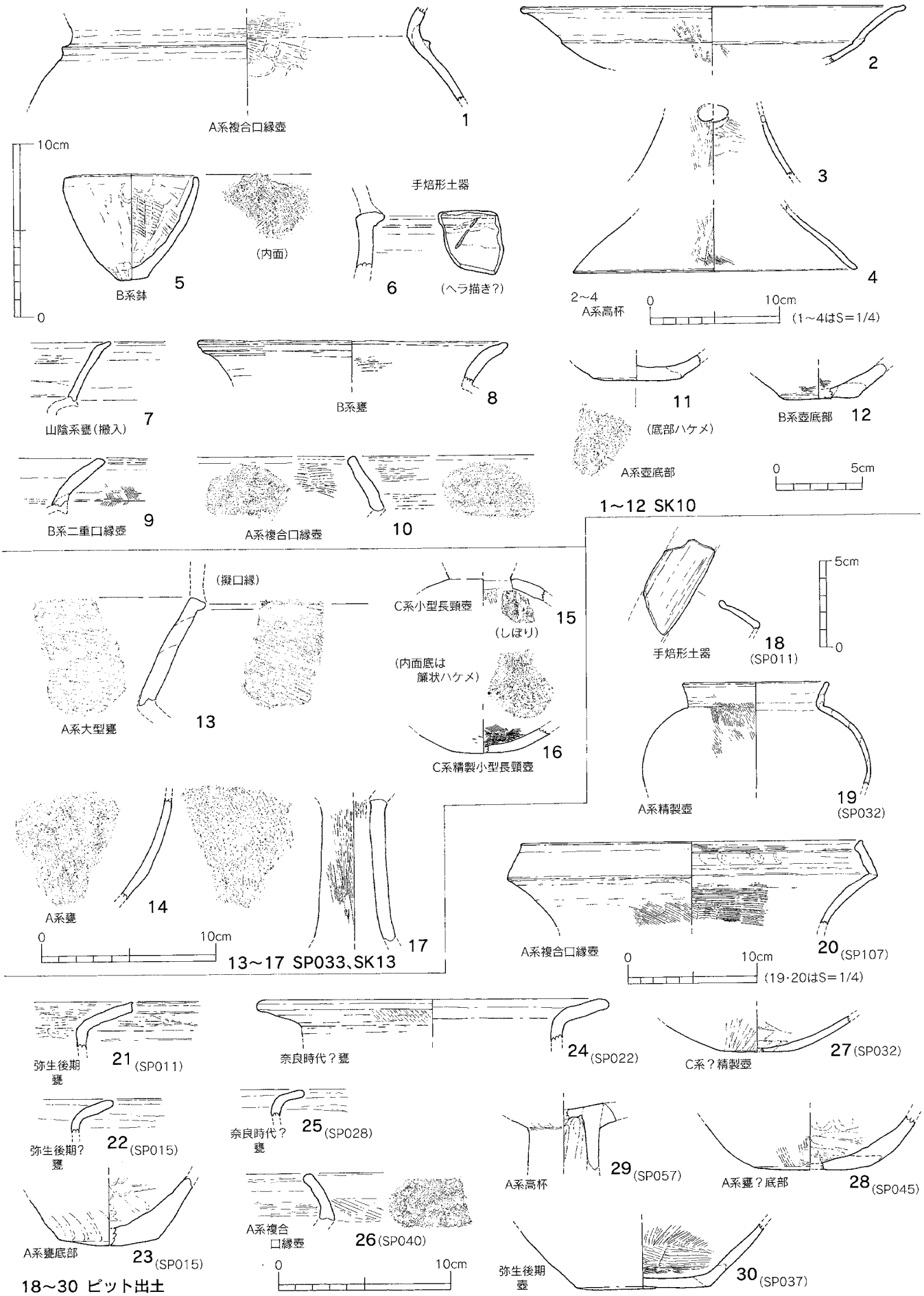


Fig.28　土坑・柱穴出土土器実測図（S=1/3、1/4）

なお、調査区南西隅の**SD003**は削平された竪穴住居の側溝の可能性があるほか、２本柱で建物とした**SB09**（調査区中央南側）も削平された竪穴住居（弥生時代後期～終末期）の可能性がある。

４．溝状遺構（SD）

（１）**SD002**（11頁Fig.20、図版３-12）　調査区中央東側検出の小溝。暗灰褐色覆土。ST12を切る。削平によりきわめて浅い残存である。最大幅47㎝、長さ195㎝。N-10°-Wで、方向的に次のSD101の延長とみられ、削平により間が消失したのであろう。古瓦片が出土し、8世紀以降か。

（２）**SD101**（11頁Fig.21）　調査終盤時に拡張した調査区南東部検出の溝。暗灰褐色から灰褐色覆土。削平によりきわめて浅い残存。底面は南側に向かって低くなる。最大幅70㎝、長さ350㎝だが南北は本来延びるものだろう。N-5°-W。遺物少なく時期不明だが、SD002と同様か。次のSD001と比べ、覆土に黒褐色土が含まれず周囲での傾向からやや新しいものか。

（３）**SD001**（12頁Fig.22、図版３-10，11）　調査区南西部検出の溝。黒褐色土～暗灰褐色土の覆土。全長930㎝以上、幅125～170㎝、深さ55～70㎝。東壁は段状斜面の部分あり。N-5°-Eで真北方位に近い。Fig.１に見るような井尻廃寺関連の広域地割の溝か（第１章３参照）。土層から何度か溝浚えないし掘り直しがあった可能性がある。下層で古瓦片が出土。　**溝状遺構出土遺物**（13頁Fig.23）　**１，３～７**が**SD001**、**２**が**SD002**出土。１，２は丸瓦、３～６は平瓦（２は丸瓦の可能性もある）。器面調整は図に記したが、凸面ヘラナデまたはナデ消し、凹面布目のものと（１,２,５）、凸面斜格子目タタキ、凹面ケズリまたはヘラナデのもの（３,４,６）がある。焼成・色調も２種あり、灰色～青灰色で硬質のものと（１～４）、明黄褐色～黄灰色でやや軟質のもの（５,６）がある。７は８世紀前半の須恵器坏身。８は撹乱出土だが奈良時代前後の甕と考えられここに掲載した。

５．土坑（SK）

（１）**SK06**（14頁Fig.24、図版３-13）　調査区中央北側検出の土坑。ST07に切られる。320×170㎝の楕円形、深さ40㎝。N-82°-W。黒褐色覆土。底面に凹凸がある。遺物も無く、時期・性格不明だが、あるいは次のSK11と対になりST08の墓域を画したものか。

（２）**SK11**（14頁Fig.25、図版３-14）　調査区中央南側検出の溝状土坑。250×80㎝の長方形。N-82°-E。東西の壁斜面は段状、横断面はU字またはY字状。黒褐色覆土。あるいは柱を建てた抜き跡の可能性もあるが定かではない。遺物は無く、時期・性格不明。

（３）**SK09**（14頁Fig.26、図版３-15）　調査区北東側検出の不整長楕円形の溝状土坑。N-2.5°-E。削平により浅い残存で、木の根の撹乱の影響も大きく、底面の生きた部分が不明確。ただしもとより底面はやや凹凸があった模様。遺物は無く、時期・性格不明だが、東側のST01やST03と方位が近く、関連する遺構か。

（４）**SK10**（15頁Fig.27、図版４-１～３）　調査区東側端検出の長方形土坑。はじめ重複が不明であったが、**SP033**に切られ、同様な土坑になると考えられる**SK13**と並立しこれを切る。332×176㎝、深さ45㎝程度。西側壁は直立、東側立ち上がりは段状になる。土層を検討すると、最下層にⅢ状に黒色土層があり、有機物の腐食と考えれば（遺体と衣服・布類？）あるいは土壙墓の可能性がある（木棺の腐食とするには幅広過ぎで、側板や小口板の痕跡が無いので無理）。遺物は土器片が散漫に出土したが、比較的時期がまとまる。　**SK10ほか出土遺物**（Fig.28）　**１～12**が**SK10**出土で、１,５～９,12がⅠB期。２～４はⅠA期になる可能性があり、10，11はⅠA期ないし下大隈式新相。B系統土器が多く（５,８,９,12）、明橙色の水漉精製胎土の**手焙形土器**（**６**）や**搬入の山陰系甕**（**７**）（壺？、草田編年５期か）があるのが注目される。**13～17**は**SP033ないしSK13**出土だが、重複に気が付かず途中まで掘削したので帰属不明である。15,16は精製のC系小型長頸壺でⅠB～ⅡA期、13の大型甕は予想さ

れる形状は複合口縁状となりⅡA期か。17はおそらくA系の高坏。

6．掘立柱建物（SB）

掘立柱建物は少なくとも9棟が復元できた（Fig.3参照）。復元した建物の多くは、覆土の特徴と重複関係から弥生時代から古墳時代初頭であろう。なお**SB04**のみは遺物は無いが、柱穴の特徴から中世に下る可能性がある。また正方位に近い建物がなく、井尻B遺跡群で特徴的な方形掘方の柱穴が認められず、調査区内には奈良時代前後の建物はなかったものか。**SB01**は1×2間（2.7×3.7m）、N-48°-Wである。**SB05**は、1×1間（2.85×2.25m）、N-6.5°-Wである。**SB03**は1×2間（2.1×3.4m）、N-20°-Wである。**SB07**は1×1間（2.5×3.1m）、N-44°-Wである。**SB08**は1×1間（2.7×3.7m）、N-63°-Wである。**SB02**は1×2間（1.85×2.65m）、N-40°-Wである。**SB06**は1×1間以上（2.55×3.0m以上）、N-67°-Eである。**SB04**は1×1間以上（3.85×4.2m以上）、N-52°-Wである。

柱穴出土遺物（Fig.28-18～30）　多くは弥生時代後期から終末期の土器だが、一部に古墳時代初頭（18,27）や奈良時代（24,25）の遺物がある。22は小片のため奈良時代の甕の可能性もある（重複関係からは弥生後期の可能性が高い）。**18**は**手焙形土器**で、Fig.28-6とは別個体である（胎土が異なる）。形態は比恵遺跡群第50次例に類似し、手法は庄内甕口縁部に類似。

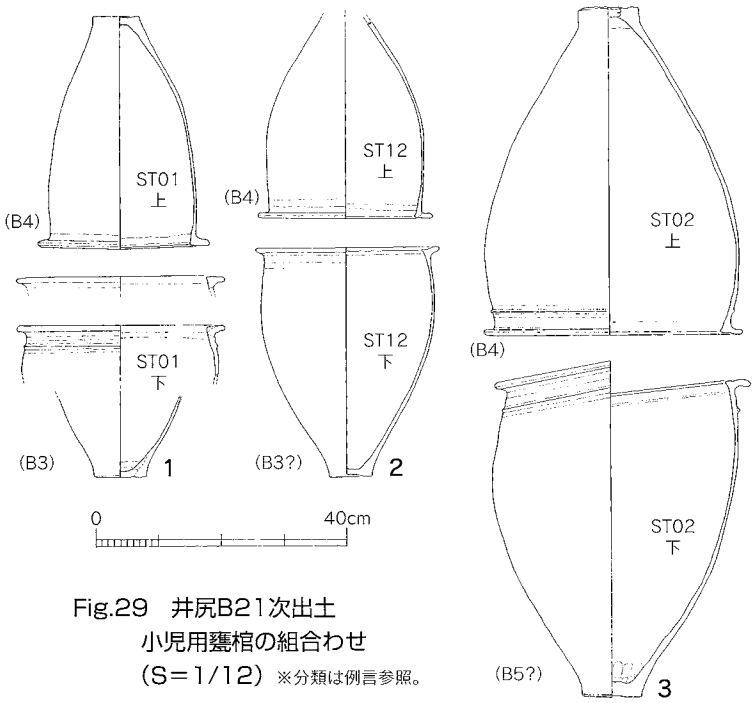
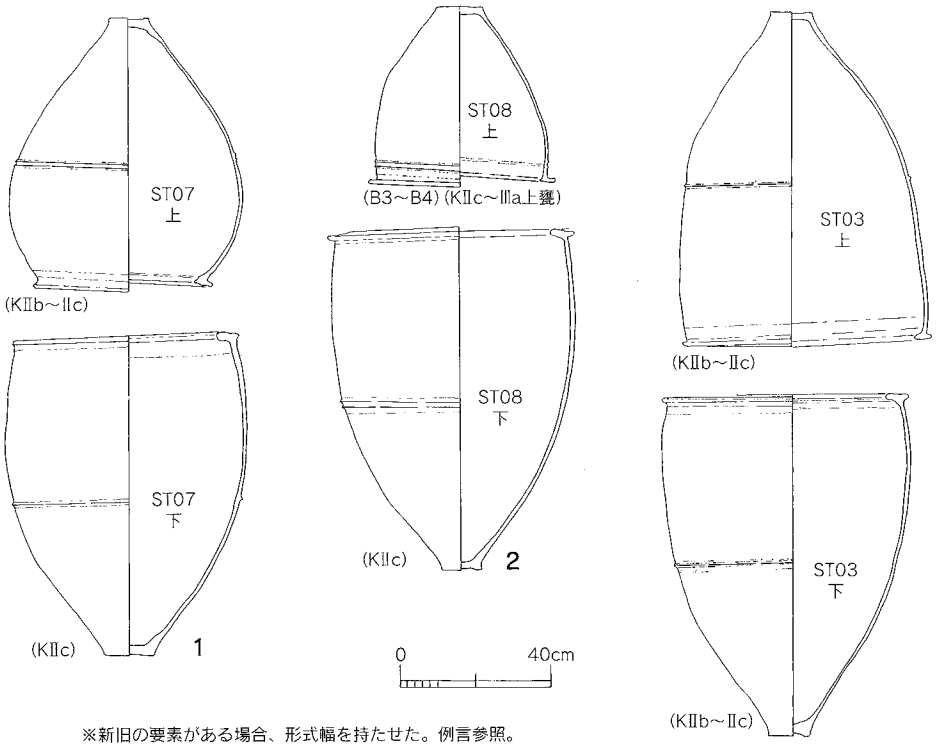


Fig.29　井尻B21次出土
小児用甕棺の組合わせ
（S＝1/12）※分類は例言参照。

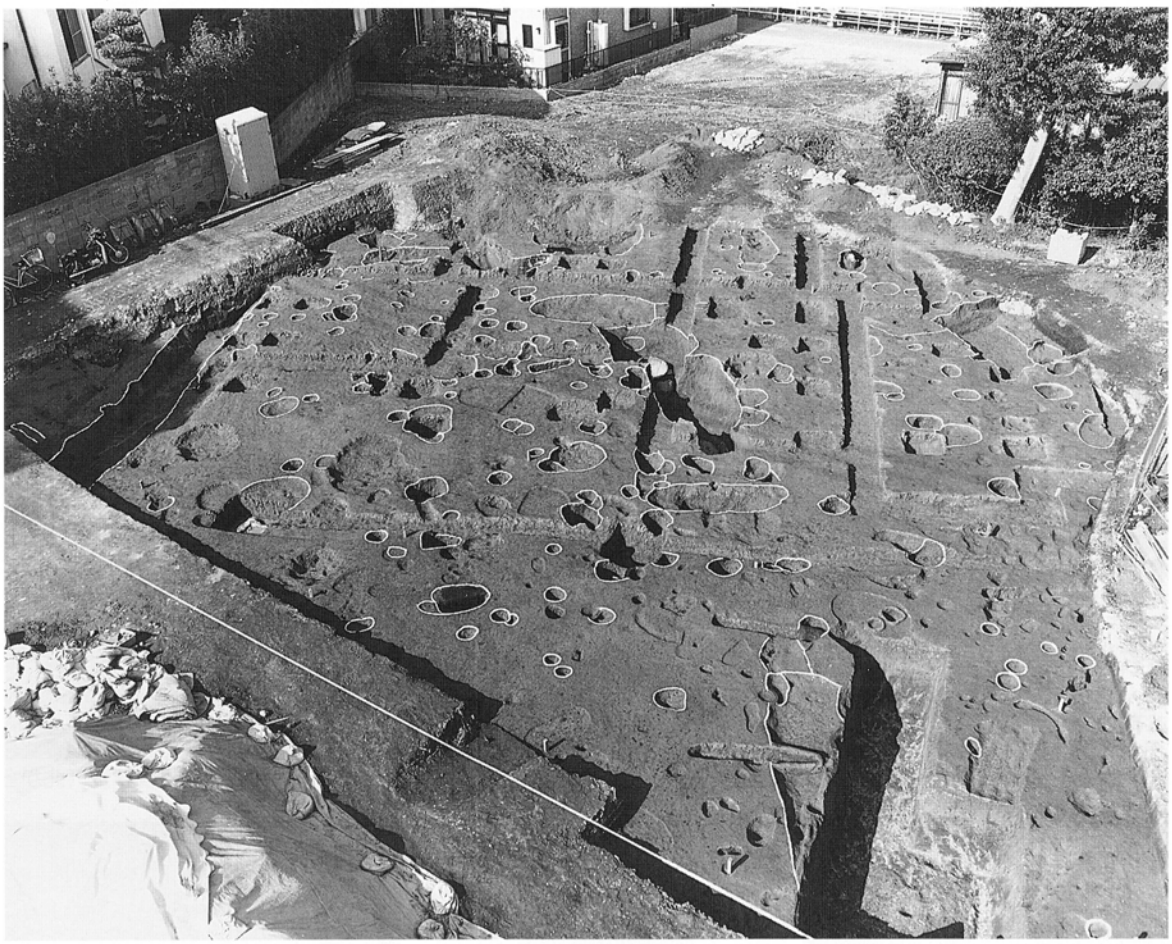
第3章　小結

甕棺の型式はFig.29・30に掲げたように橋口達也氏の編年のKⅡb～Ⅱc式、小児棺は須玖Ⅰ式の新相（田崎博之氏の編年の須玖Ⅰ式新段階）にほぼおさまる(ST02を除く)。墓地の継続期間はあまり長くないものであろう。おそらく中山平次郎が報告した甕棺も同様の時期であったと考えられ、墓地全体の規模も大きくなかったと考えられる。



※新旧の要素がある場合、形式幅を持たせた。例言参照。

Fig.30　井尻B21次出土成人用甕棺の組合わせ（S＝1/20）

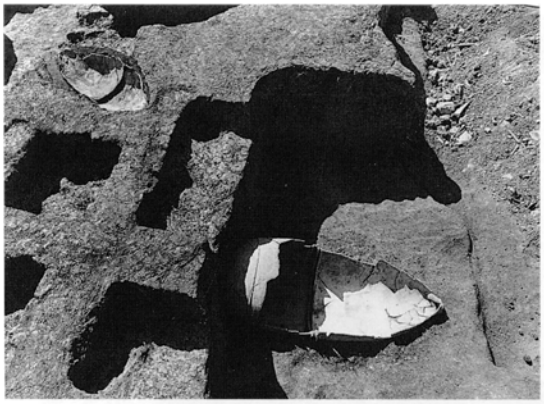


1．調査区全景（南から）

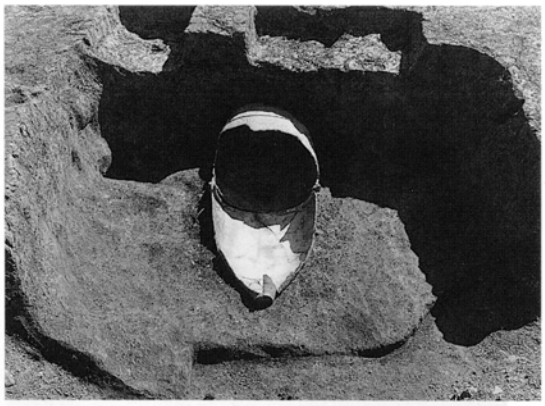
2．調査作業状況（西から）

3．ST07・ST08・SK06検出状況（南西から）

4．調査区東半甕棺墓群ほか出土状況（北から）



1．ST03・ST02（左上）出土状況（東から）

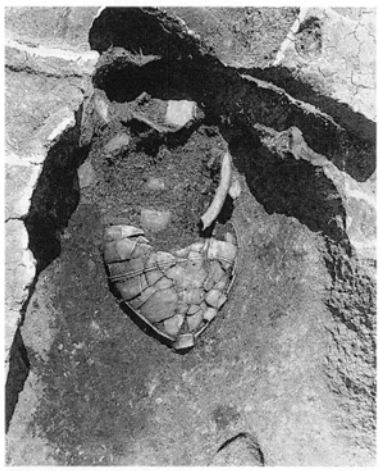


2．ST03出土状況（北から）

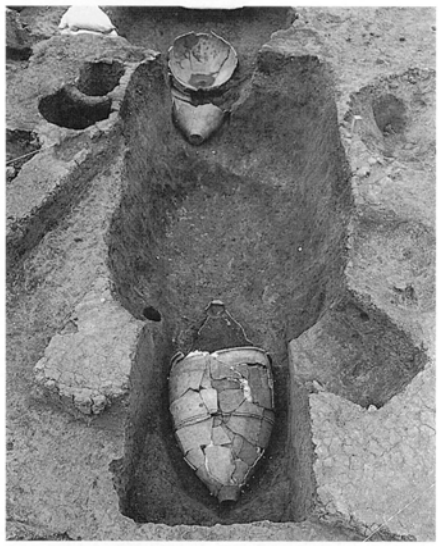
3．ST03出土状況（南から）

4．ST03墓壙底面状況（北から）

5．ST03甕棺検出状況（東から）



6．ST07甕棺検出状況（北から）

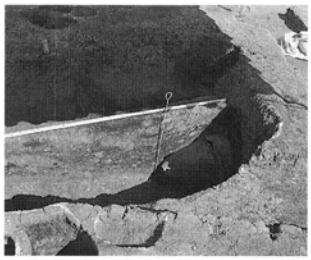


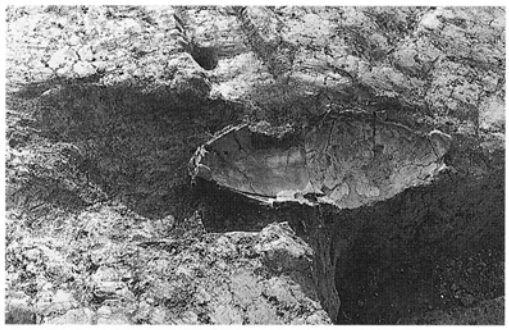
8．ST08（手前）・ST07（後方）出土状況（南から）

7．ST07出土状況（東から）

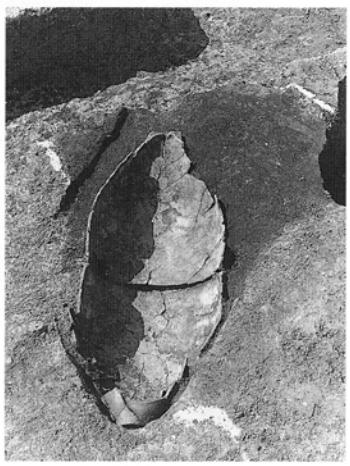
9．ST08出土状況（南から）

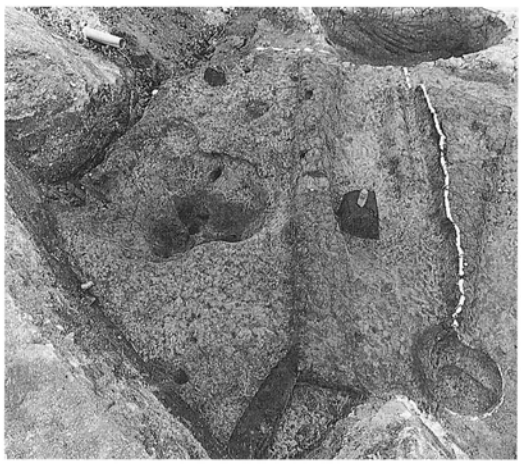
1．ST08完掘状況（南から）

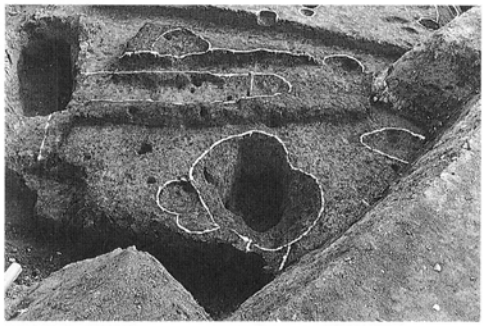

2．ST08墓壙埋土土層状況（西から）


3．ST01出土状況（東から）

4．ST12出土状況（南から）

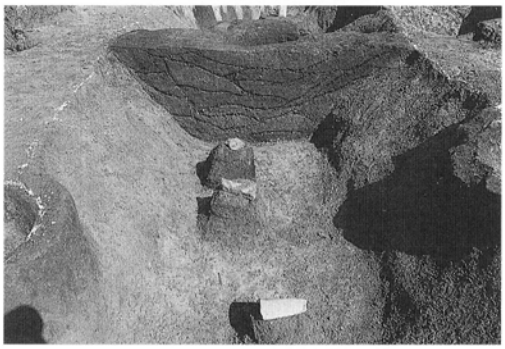

5．ST02出土状況（北東から）

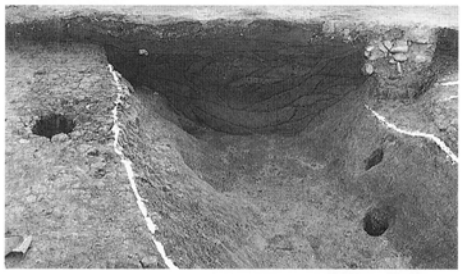

6．SC01出土状況（西から）


7．SC01完掘状況（北から）

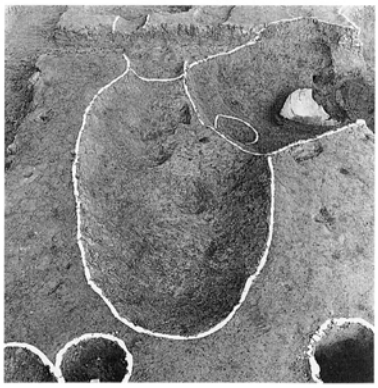
8．SC01ベッド部下土層状況（東から）

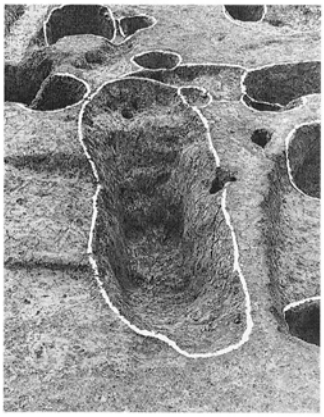
9．SC01柱穴土層状況（西から）

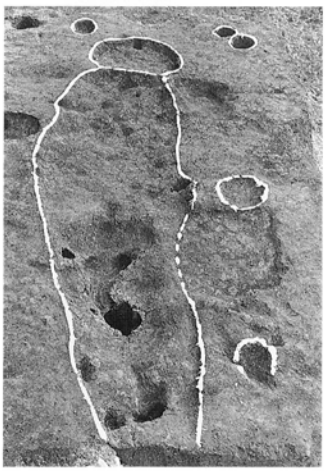

10．SD001ベルト1土層（南から）


11．SD001調査区南壁土層（北から）

12．SD002出土状況（北から）


13．SK06完掘状況（西から）

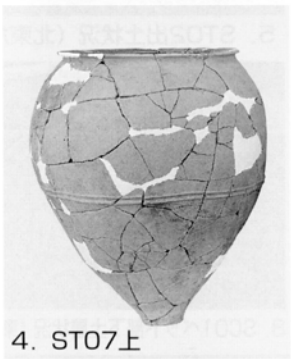

14．SK11完掘状況（東から）


15．SK09完掘状況（南から）

1．SK10東西ベルト北側土層（北から）

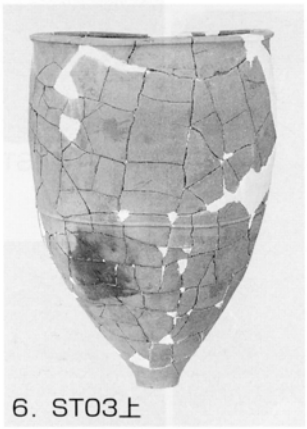
2．SK10東西ベルト南側土層（南から）

3．SK10，SP033・SK13（手前）完掘状況（東から）



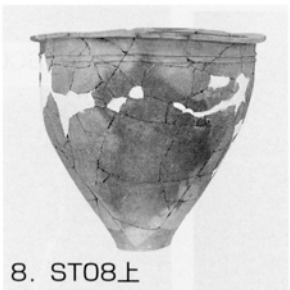
4．ST07上

5．ST07下



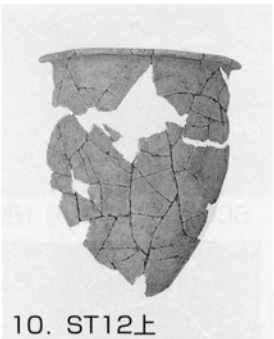
6．ST03上

7．ST03下



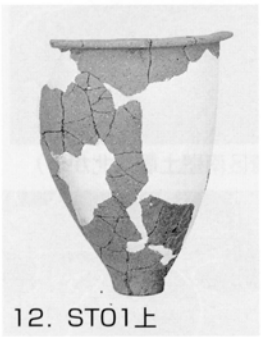
8．ST08上

9．ST08下

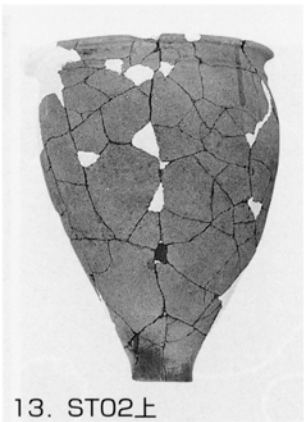


10．ST12上

11．ST12下



12．ST01上



13．ST02上

14．ST02下

報告書抄録

書名　ふりがな	いじりびーいせきじゅうさん
書名	井尻B遺跡
副書名	井尻B遺跡群第21次調査の報告
巻次	13
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	788
編著者名	久住猛雄（編著）／吉留秀敏（石器）
編集機関	福岡市教育委員会
発行機関	福岡市教育委員会
発行年月日	20040331
郵便番号	〒810-8621
電話番号	092-711-4667
住所	福岡市中央区天神１丁目８番１号

遺跡名　ふりがな	いじりびーいせきぐん
遺跡名	井尻B遺跡群　第21次
所在地　ふりがな	ふくおかしみなみくいじり５ちょうめ９ばん２・５・20
所在地	福岡市南区井尻５丁目９番２・５・20
市町村コード	40134
遺跡番号	4013000090（奈文研番号）
北緯	33° 32′ 56.88″（日本測地系）
東経	130° 26′ 38.58″（日本測地系）
調査期間	20010917-20011105
調査面積	366㎡
調査原因	共同住宅建設
種別	集落／墳墓
主な時代	弥生時代（中期～終末期）／古墳時代（前期）／奈良時代／平安時代（初期）／中世
遺跡概要	甕棺墓６（弥生時代中期）、竪穴住居１（弥生時代終末期）、土壙墓１（弥生時代終末期）、土坑４、溝状遺構４（うち１条は奈良時代～平安時代初期の南北溝）、掘立柱建物９以上、柱穴多数
特記事項	弥生時代中期前半（汲田式）の甕棺墓地は大正年間に中山平次郎が報告した地点の続き。井尻廃寺関連の周囲地割とみられる奈良時代溝状遺構。
備考	

井尻Ｂ遺跡　13

―井尻Ｂ遺跡群第21次調査の報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第788集

2004年３月31日

発　行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目８-１

☎092－711－4667

印　刷　セントラル印刷株式会社

福岡市中央区大宮１-５-13

☎092－522－3181

井尻B遺跡13

福岡市埋蔵文化財調査報告書788集

2004 福岡市教育委員会